

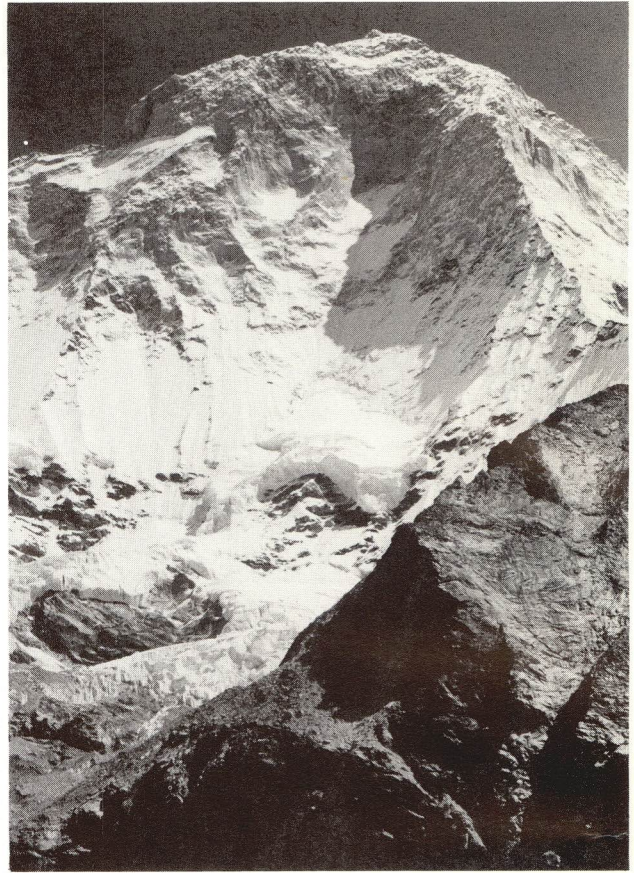
MAKALU

YUKIHYO CLUB JAPAN MAKALU EXPEDITION 1992 / AUTUMN

雪豹クラブマカルー登山隊 1992

YUKIHYO CLUB JAPAN MAKALU EXPEDITION 1992

BCよりマカルー西壁
北西稜へは左側へ
大きくまわり込む



= 目次 =

はじめに	岡田貞夫	5
計画まで	村口徳行	7
マカルー日誌	山本 修	10
第1次アタック	村口徳行	20
第2次アタック	石川一郎	22
個人別行動表		27
装備報告	村口徳行	28
食糧報告	山本 修	28
医療報告	山本 修	29
マカルーを終えて		
雑感	石川一郎	30
たのもしきシェルパたち	山本 修	30
その日	村口徳行	33
もう一つの土曜日 part2	岡田貞夫	34
会計報告		36
御協力者名簿		37
編集後記		38



(上) マカルー・ラへのルート工作。雪崩の危険におびやかされながら、深いラッセルを延々と続ける。

(下) ロープが張られ、何人も同ルートに登下降した。ルートを開くことは、その登山隊あるいは個人にとって重要な問題だと思う。



▶ C 2 より上部を望む。正面のクーロワールがマカルー・ラへの最短ルートだ。



▶ C 3 (7,400 m)
マカルー・ラには2張の天幕が張られた。



▶ 9月29日、C 3 を後にC 4 へ向う
(第1次アタック隊)



▶ C 4 (7,800 m) 後方はマカルー II 峰



▶8,000mを越えて、なお深い雪に苦しめられた。先行するフルバ・ギャルツェン（第2次アタック隊）



▶登頂を断念し、下降に向う
（第1次アタック隊）



▲全員がB Cに引き上げると、強風が吹き出した。
マカルーには流れの早い雲がいくつも現われては、また消えた。



▲登頂は失敗したが、全員の顔がB Cにそろった。

はじめに

1950年フランスのアルピニスト達は、人類初の8,000m峰を征服したが、苛酷な下山をしいられ大きな代償をさしだした。しかしその5年後、当時最も困難な未登峰として存在していた巨峰のマカルーにおいて、全員登頂の完璧な登山を行なった。アンナプルナ峰登山における反省、検討、研究がこの輝かしく素晴らしい登山に生かされた事はいうまでもない。

1986年秋、私達はヒマルチュリ南稜の初登攀に成功したが一人の大切な仲間を失った。その時、村口と私は帰りのキャラバンで次のような話を話し合っていた。悲しい体験としてしまいこむのではなく、未来へ継承、実践して行く事が、ヒマルチュリの反省に繋がるのではないかと。そしてその対象となる山として、当然のごとく未知なる高さへ目は向けられたが、8,000m峰であればどこでもという気にはなれなかったし、登頂確率の高さから選ぶような気にはなれなかった。存在感に感動を覚え、荘厳で美しい独立峰であり、私達の境遇をあの時のフランス隊に重ねる事で、新たな希望が持てる気がして、二人の間でマカルーの名が浮かび上がり一致した。

*

この計画を具体化するにあたり、経験の少ない我々には常に「死」への危険度の高い行動から考えて、後継者を育てようという登山になるはずもなく、まして学生の参加を認める気にはなれなかった。あらゆる面で無駄を省き、学んできた多くの事を最大限に生かし、研究を続け、最小限の資金にとどめるシンプルなチーム造りを目指した時、我々の育った日大山岳部、桜門山岳会の総意とは違った立場となるため、雪豹クラブを設立、マカルーをブッキングしたのが1989年の冬であった。

出発の一年前になると石川、続いて山本の参加が決まった。シェルパのリクエスト、登山日数の短縮化、酸素使用等タクティクスの組み立てもほ

ぼ終了していた。

マカルー峰登山の目的は、4人揃って頂きに立つことであるが、頂きに対する価値観はそれぞれが異なっていて当然であるし、各自の登山感の中でこのマカルー峰をどのように位置付けるかも違ってくる。隊の目標は一つではあっても各自の目的意識、価値観を生かしたトレーニングの日々が出発の前日まで続いた。そしてモンスーンの最中、正に「I」の字のように切り立ったマカルー西稜の真下5,300mの台地にBCを建設した。

9月7日に登攀を開始し、3週間後には2回のアタックを行なうに至った。

果たして、女神は微笑まず、我々は頂きの向こう側を見ることなく4人だけのジャイアントへの挑戦は終わった。

*

登山活動は高度差1,000mに達するC2～C3間の雪崩の危険に脅えながら、深雪の中、長く、遠く、はるかなる高さへの戦いであったが、シェルパ達の積極的な協力もあってルート工作、荷上げ等の問題も日一日と解決していった。一方で、新たな問題が発生していた。今年のマカルーBC付近には各国6隊（4隊がI峰、2隊がII峰）がマカルー・ラまで全く同一のルートを選定しており、その結果我々の張ったFIXロープの使用を、後続の5隊より次々と申し込まれた。その都度、我ベースハウス内にて話し合いが行なわれ、ロープを現物支給する隊、最後の回収を行なう隊などの約束事により、いつの間にかマカルー北西面を舞台とする、日本2隊、スペイン2隊、フランス、スイス各国による国際友好的登山(?)は進行していった。そして日本で建てた計算通りの短期間の内にアタック態勢が整ったのは、理想的な4人の好調な高所順化を証明していた。

アタックは天気恵まれ、まず間違いなくマカルーの頂きは踏めるであろうと誰もが確信したに違いない。されど雪の深さと重さは我々の希望を裏切り、7,800mの最終キャンプからもラッセルで始まった。第1次隊は8時間を費やしたにもかかわらず、標高差にして僅か200mしか獲得できず、その後4時間におよぶ頑張りも、明日の仲間

に繋げる行為として終わった。翌日は無風で迎えた。深夜スタートし、太陽の昇りきった10:00頃には頂上真近に迫る第2次隊の姿を覗けるはずであったが、予想よりもはるかに低い標高でラッセルに苦しめられ遅々として進まぬ石川の姿をとらえたのが現実であった。最高到達地点 8,300m、頂上迄 160mを残し、タイムリミットで我々の登山は終了した。

*

村口と一緒に初めて参加したヒマラヤ登山から10年の歳月を費やし、そこに憧れの 8,000m峰マカルーがあった。準備期間中に組み上げたタクティクスを、経験の乏しさにもかかわらず全く無駄

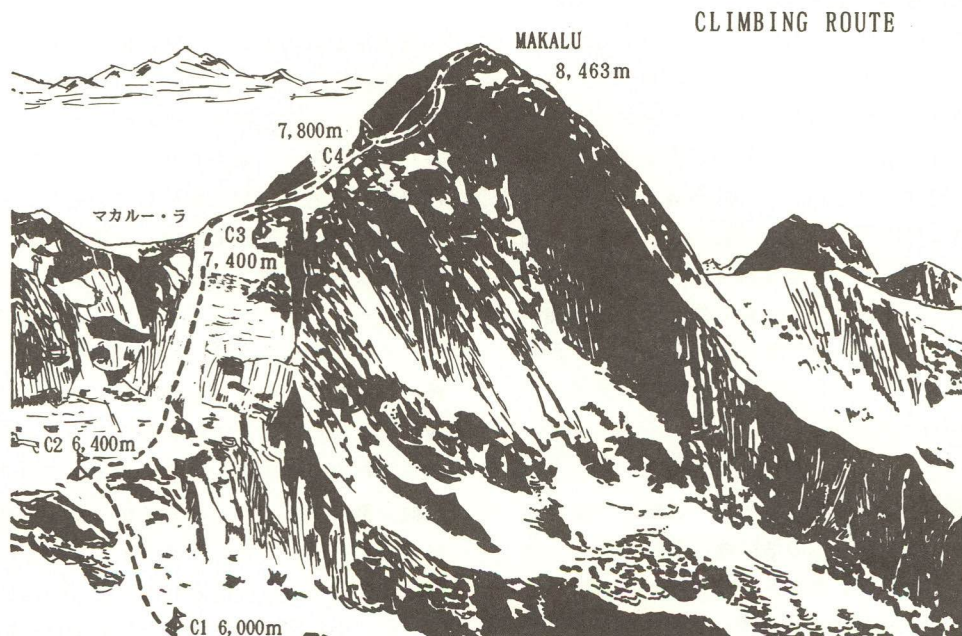
なく実践することができたこと、また誰一人怪我することも無く安全圏に戻り、全員一緒に帰路のキャラバンを行なえたことは、何にも増して幸せなことであった。そして今回の登山を十二分に堪能した現在、心地良い疲労感が4人の身体を被っている。

*

最後になりましたが、雪豹クラブマカルー登山隊1992に多大なご援助、ご協力を頂きました皆様に深く感謝し、心より御礼申し上げます。

雪豹クラブマカルー登山隊1992

岡田 貞夫



行動概要

8月2日	先発隊 日本出発	9月20日	C3建設(7,400m)
9日	後発隊 日本出発	24日	C4建設(7,900m)
13日	カトマンズ発 キャラバン開始	30日	第1次アタック 8,200m到達
28日	BC建設(5,300m)	10月1日	第2次アタック 8,300m到達
9月3日	C1建設(6,000m)	7日	BC撤収
10日	C2建設(6,400m)	17日	カトマンズ着

計画まで

村口 徳行

マカルーを決定するまでのいきさつは、すでに岡田が述べているので省略し、ここでは、ルート・背景・準備等について触れてみたい。

1989年冬、マカルーをブッキングするにあたり、岡田といくつかのルートを検討した。マカルーを考える場合、私達にとってはまず8,463mという高度の問題を解決してゆく必要があった。低い方の8,000m峰であるなら、さほど問題はないと思われたが、マカルーの標高は充分な研究を必要とする重要な部分だった。こうした課題をかかえている以上、最も易しく安全なルートというのが当然のことながら考えられるわけで、ヘタに理想だけでルートを決定するわけにはいかない。

しかしながら、フランス隊の西稜、ユーゴ隊の南壁、日本隊の東南稜など、それぞれが特徴をもった魅力的なルートであり、それらのルートを検討しないわけにはいかない。これらは、高高度における岩壁登攀という問題を解決しない限り、成り立たない計画なのであるが。

私達は、6年前の1986年秋にヒマルチュリ南稜の初登攀に成功した。しかし、その下降で1人の仲間を失った。ヒマルチュリは、5,000mぐらいから岩稜が続き、氷壁と岩壁のミックスされた長いルートで、特に7,200mから始まる未踏の壁の突破が最大のポイントだった。その登攀は我々がかかえていた多くの課題を克服したとても良い内容だった。できれば、その延長線上にある山・ルートを求めたいという欲求がごく自然に生まれていた。しかしながら、西稜は、我々の実力ではとどかないという判断、東南稜は日本隊の苦労を見ただけでもわかるように、高所での距離の長さがあり、少数の私達の隊には向いていないので、これは問題外となった。写真をよく見ると、西稜と東南稜の間に大きく広がる南壁に可能性を求められるような気がした。

はたして私達が行なったヒマルチュリの登攀をマカルー南壁に重ね合わせることができるのであろうか。事故が起きたことと実力とが直接結びつくものであったのか、別の山であつたら事故は起きなかったのか。南壁のルートは、非常に理想的なラインを縫って頂上へ続いている。1972年秋、10名のユーゴ隊は、初めての試みで8,000mラインを越えた。続く1974年春、メスナーを加えた10名のオーストリア隊は多量の降雪のために7,500mで、また、同年秋の国際隊8名も悪天候と不調者の続出、隊員間の不和などで7,800mで敗退している。1975年秋、再びユーゴ隊21名が挑み、7名が登頂に成功した。

今回の私達の場合、おそらく、メンバーが多くは集まらないだろう（客観的に見ても残念ながら参加できる環境にある者、あるいは行こうとする人間が少なく思えた）。最終的には岡田と私2名でも実行するという形で進めていくしかなかった。そうした場合、南壁はまったく無理だった。もともと私達は強いチームを作るために、メンバーを集め、その方法を採用入れようという考えは当初からなく、行きたいヤツが行けば良いと考えていたわけだから、もうヒマルチュリの時のような登攀力を増すための事前のプログラムは必要なかった。私達は気楽な登山を考えていた。2人でもっとも可能性のある北西稜からのルートに決定した。ただひとつ、北西稜への登り方で、フランス隊がとったルートを採用するか、1982年に山学同志会隊が登ったルートにするかは、実際に現地に行ってみるまでその決定は持ち越された。

どちらにしても、気楽とはいえ、先に書いたようにマカルーの標高は、私達にとっては未知だ。技術的な問題は、まったく無視してもよかったが、体力だけは必要なルートだ。我々が高所の問題をとらえる場合、いつものように反復してトレーニングに励むことを前提とした。日本でのトレーニングは、全て個人のスタイルを優先する。メンバーが増えたとしても、揃ってトレーニング山行などは行なわない。めんどろな事はいっさい止める。“山なんか、行きたい時に行けば良い”というように話を話した。

私達の呼びかけで、山本修と石川一郎の参加が決定したのが1年前。学生からの参加希望は涙を飲んで断った。

雪豹クラブを発足させた目的のひとつは、わずらわしい大学山岳部と距離を置くことであった。特に遠征などの話になると、組織として盛り上げようとする良い部分がある反面、個人に負担となりすぎる部分がある。さんざん世話になって義理を欠くヤツだといわれるかもしれないが、そのために、自分達の相手とする目的やエネルギーの使い方を取違えられてしまう程つまらないものはない。いい部分だけでは成り立たないものかもしれないが、私達の選択はシンプルを望んでいた。それは個人がストレートに山と向かい合うことでもあった。自分達がかもともやりやすい方法でマカルーへ行くことが、雪豹クラブ発足の大きな理由であった。

実際の準備は1992年に入ってから行なわれた。要点をおさえ、それぞれが担当した役割さえきちんと進めてゆけば大した事前の打ち合わせは必要

としない。そうした事も十分にわかっていたので、無駄な時間や金を切り詰められたし、遠征隊につきものの大げさな梱包作業も、ほとんどのものはカトマンズで調達する方針であったので、まったくする必要が無く、いくつかのパッケージがほんの数時間で完成したのであった。

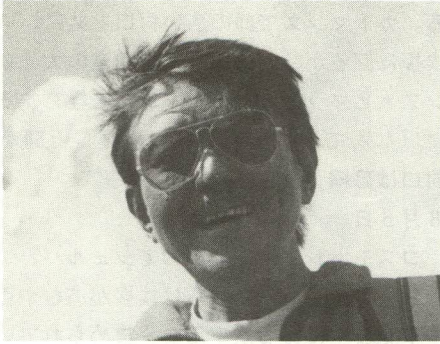
準備期間中の反省点を強いて掲げれば、あまりに簡単で、本当にマカルーへ行くという重みを感じられなかったことと、毎度繰り返される岡田・村口両者間での意見の食い違いといったことぐらいただろうか。

全体的にみれば、梱包作業や集会などが個人的に負担になったりすることなく、最低限必要な打ち合わせもできたわけであるのだから、雪豹クラブの目標とする“シンプル”の一部分には近づけたものと思う。

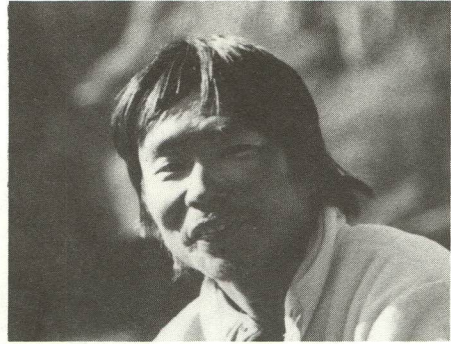
村口・山本の先発隊は、日本での準備を簡略化していた分だけ、カトマンズでの作業が増えたわけだが、順調に梱包も終了し予定日より1日早くキャラバンをスタートさせることができた。

▷ 隊の構成 ◁

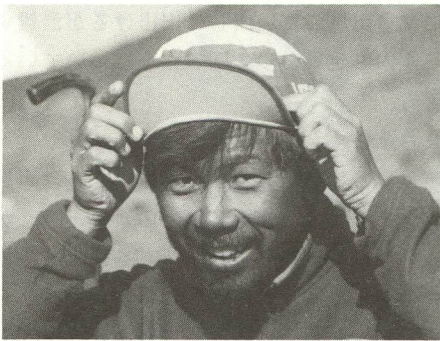
隊 長	岡田 貞夫	42才	総務
隊 員	村口 徳行	36才	輸送・梱包・装備・渉外
”	山本 修	30才	医療・会計・梱包
”	石川 一郎	29才	渉外・食糧
サ ー ダ ー	ニマ・テンバ	36才	
高 所 シェルバ	アン・カミ・ツェリン	37才	
	アン・サルキ	30才	
	フルバ・ギャルツェン	24才	
コ ッ ク	アン・パサン	32才	
キッチンボーイ	リンジ・シェルバ	19才	
メイルランナー	カミ・プルバ	28才	
リフト・ワイサー	クリシュナ・シュレスタ	34才	



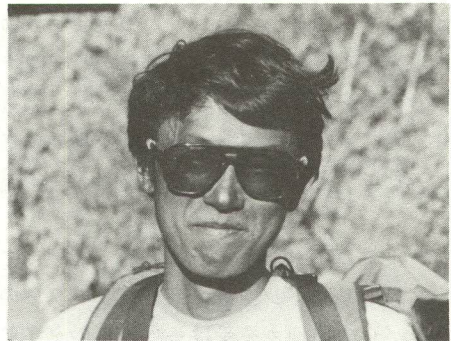
岡田 貞夫



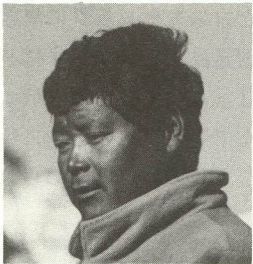
村口 徳行



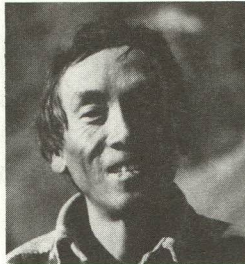
山本 修



石川 一郎



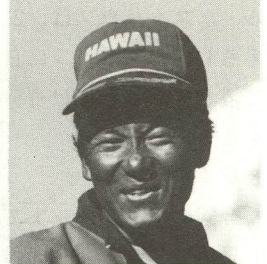
ニマ・テンバ



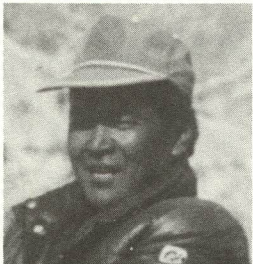
アン・カミ・ツェリン



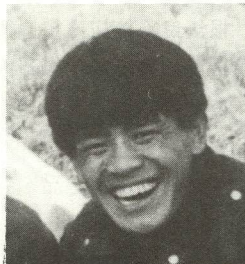
アン・サルキ



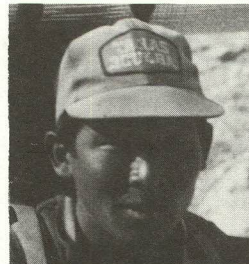
フルバ・ギャルツェン



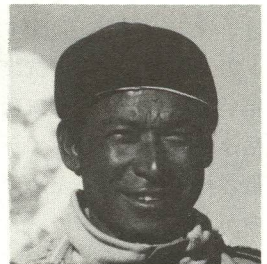
アン・パサン



リンジ・シェルバ



カミ・プルバ



クリシュナ・シュレスト

マカルー日誌

山本 修

カトマンズ

8月2日

村口、山本の2名が先発として、昼過ぎの成田をユナイテッド航空 821便でバンコクへと出発する。私は機内でニュージーランド人の英会話教師達とビールをグイグイ飲んだが、私達がバンコクのホテルの予約をしていないと言ったら、「それ、普通の日本人じゃないよ!」とすっかり馬鹿にされてしまった。

8月3日

バンコクよりロイヤルネパール航空 408便にてカトマンズのトリブバン空港に到着、サーダーのニマ・テンバラの出迎えを受ける。先日のタイ航空機の墜落事故のために黒いネクタイをした日本人を多く見受ける。宿となったインターナショナル・ゲストハウスは、24時間ホットシャワーは使えるし、レストランに日本食はあるして貧乏旅行に慣れている私には身分不相応!? ちなみにシングル1泊、16US\$。

8月4日

今回のエージェントであるコスモトレックにて群馬岳連の八木原氏、HAJの飛田氏とお会いする。両氏、コスモトレックのジョシ氏、サーダーと共に観光省に行き、挨拶を済ませる。八木原氏は、来年より5万US\$に値上げされるエベレストの登山料について抗議をしていたが、大臣でも相手にしないかぎり無駄な様子だ。その後、群馬岳連の酸素器具、ヒマラヤ同人のEPIガスを拝借させていただくためにエクスプレス・ハウスに向かう。

8月5日

レストラン富士に保管させていただいていた隊荷を引き取り、コスモトレックに運び込む。また、

ヒマラヤン・ジャーニーの大河原夫人とお会いする。カトマンズで顔の広い村口と共に、いろいろ挨拶に回るが、大河原夫人や私達の大先輩でトランス・ヒマラヤ・トレッキングを経営する宮原氏に「なんでうちを使わないの?」と聞かれると村口は恐縮しきり。

8月6日

コスモトレックにて初めてシェルパ、コックらと顔合わせをする。彼らは挨拶が済むや否やコスモトレックにある炊事用具、集められていた酸素ポンベの点検を始めた。その手際の良さにすっかり感心してしまう。その後、山本はコックらと共に炊事用具の買い出しに出掛けるが混雑するバザール内を足早に歩き回る彼らについていくのも一苦労。

8月7日

食糧の買い出し及びパッキング。荷車を引くトラクターが2往復するほどの量であったが、シェルパ達は瞬間にパッキングを終えてしまう。それに対して我々日本人の仕事の遅いこと、「明日でいいか」「BCでいいか」とさきのばし、さきのばし。それでも順調なものである。

8月8日

午前10時にシェルパ達とコスモトレックに集合するが、空輸されてくる別送品がまだ届かずにパッキングするものもなくなったので昼には解散する。帰り道、ビールを飲んでいてシェルパ達に呼び止められ、一緒に飲むが下戸の村口は勧められるままに飲んでフラフラになってしまった。

8月9日

山本はサーダー、コックらと不足品の買い出しをする。しかし、彼らと買い物をするのも疲れる。根気良く値切るし、彼らの友人達がひっきりなしに現れる。後発の岡田隊長、石川が大勢の見送りを受けて成田を出発、バンコクに入る。

8月10日

村口は、別送品を受け取るために空港へ向かう。その後、私もサーダーと共に空港で隊長、石川を出迎える。疲れている2人には悪かったがコスモトレックへ直行、リエゾンオフィサーを除く全てのメンバー、全ての装備、食糧が集結した。パー

トナーも来て、私も久々にウイスキーがすすむ。

8月11日

朝6時、ベロベロに酔った隊長に叩き起こされる。とんでもない大迷惑、大ひんしゅく。村口が隊長を怒鳴りつける。午前中で個人装備のパッキングを終える。やっと行くんだな、という気になる。夜は宮原先輩と会食。宮原先輩に伺う30年前のネパールの話は信じがたいほどだ。

8月12日

ゴタゴタとしながら、今日も10時にコスモトレックに出勤！ 明日出発の輸送隊の60個余りパッキングを全て終了させる。しかし、村口、山本はカトマンズ到着以来、「カッターライナー」「ネムタイナー」の連発であった。早くカトマンズに着いてのんびりしようというのは、実に甘い考えで東京以上にせわしなかった。ビスタリズムもどこへやら、という気がする。また、岡田隊長、サーダー、ジョシ氏は観光省でブリーフィング。リエゾンオフィサーも決まり、マカールの正式許可証を受け取る。

キャラバン

8月13日 輸送隊／カトマンズ出発

ヒレに向けて村口、シェルパ3名、キッチンボーイらが大量の荷と共にバスで出発する。これでゆっくりとできる。昼寝できたことが妙にうれしい。石川はカトマンズでも個人的な仕事で忙しくしている。夜、私達が育った日大山岳部の高緑監督が到着。監督持参の吟醸酒などを楽しむ。

8月14日 輸送隊／ヒレ到着

朝8時、ヒレの村口より電話。予想以上に早くヒレに到着した。明日、キャラバンに出発すること。明日のツムリントールへのフライトの出発時刻が朝7時と決まる。あまりの早さに多少ショックを受ける。夜はホテル・ヤク&イエティで監督と共に最後の晩餐。

8月15日 本 隊／カトマンズ出発→ツムリントール

輸送隊／ヒレ→マンマヤ

5時過ぎにコスモトレックに集合、雨が激しく

降っている中、空港に向かう。今日はダメかと思いかけたが3時間遅れでツインオッター機はテクオフした。約1時間で、岡田、山本、石川、リエゾン、サーダー、キッチンヘルパーの7名は無事にツムリントールの空港に降り立つ。当初はこのメンバーで、輸送隊より先行する計画であったが、彼らが順調にヒレに到着したのでここで待つことにする。ホテル・マカールにチェック・インするがホテルというには余りに粗末だ。ちなみにとなりはホテル・カンチェンジュンガ。

8月16日 本 隊／ツムリントール滞在

輸送隊／マンマヤ→スルティバリ

何もないこのツムリントールの滞在はひたすら暑いだけだ。夜には、なまはげのような面をした若者を中心としたグループが一軒一軒、踊りを披露しながらまわってくる。悪魔払いでもしているのだろう。しかし、「パイサ、パイサ」とやたらと金をせがんでくる。これも、風習にのっとった若者達の小遣い稼ぎに違いない。しかし、暑い。いったい1日に何回「暑い！」と言っているだろう。

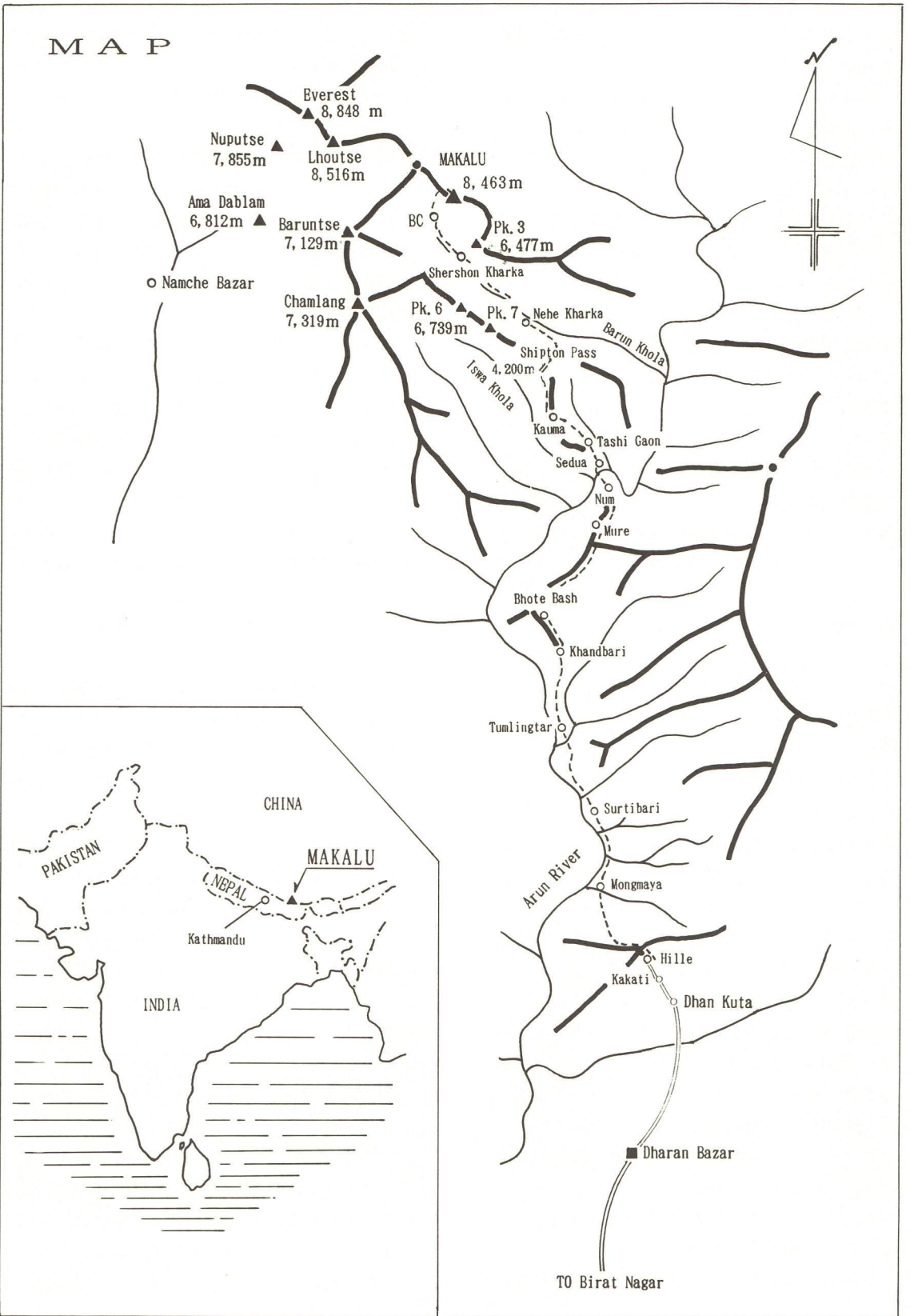
8月17日 本隊・輸送隊ツムリントールにて合流

朝食を食べるとまた寝てしまう。「暑いのによく寝るねえ」と冷やかされるが、隊長や石川も「三国志」を読んでいたかと思うと寝ている。昼食後、隊長が「村口はいつ来るかなあ」とサーダーのニマ・テンバに質問して、彼が「あと1時間くらい……」と答えていたら、輸送隊の先頭、シェルパのアン・カミが姿を現す。しかし、先頭の到着からポーターのラストが到着するまでには5時間を要した。皆、炎天下の30kgには参ったようだった。ポーター85名、総勢では100名程の大行列である。

8月18日 晴～雨 →マニバンジャン

私にとって初めてのキャラバンである。パッティでチャイを、ロッジではビールを飲み、俳優の「すまけい」そっくりのナイケに道を教えられ、アン・カミにはだまされ(?)とのんびりしたものである。今日のマニバンジャンの宿を、シェルパ達は「ウルスキャンプ(のみの宿)」と言っていたが、眺めもよくて、この田舎にしては快適だ

MAP



ろう。それよりも問題は隊長のいびきである。

8月19日 曇～雨 →チチラ

いよいよズガの襲来である。ポータパスを越え樹林帯に突入すると濡れた葉の裏にズガが見え隠れするようになる。早速、私の小指にも吸い着いているのではないか。それ以後、すっかり無口になって真剣に歩く。今日はテント泊まりであるが、キャンプサイトにもズガは多く、テントの中にも侵入してきた。これがあと何日も続くかと思うとクレイジーになりそうだ。それに比べ、ズガに慣れている3人は泰然自若としている。

8月20日 曇～雨 →ヌン

今日もズガにおびえながら、4人揃って歩き出す。ポーター達も山賊の出没が噂されるエリアに入ると一団となって歩いていた。ヌンへの下りは雨のためにツルツルである。そこを裸足やビーチサンダルだけで下るポーター達はたいしたものだ。

8月21日 霧～晴～雨 →セドワ

ヌンからアルン河へと下る途中、便意を催し、藪の中にしゃがみこむと、一斉にズガがたかってくる。尻を拭くこともままならず、飛び出す。その間には、ザックにもズガが5、6匹付いている。始末に負えない。また、ポーターの1人が荷物をアルン河の谷に落としてしまう事件発生。急流に吞まれる寸前で止まり、無事に回収はできた。セドワの宿は、粗末な雑貨屋の2階の部屋。雑貨屋のミナ・ライという17才の娘が可愛くて隊長からポーターまでいろいろめきたつ。

8月22日 雨 →タシガオン

今日もずいぶんとズガがいるらしく、シェルパ達も塩をくるんだ布を棒切れの先につけてズガ除けにしている。案の定、タシガオンへの道はさながらズガ街道とも言うべきか。立ち止まればたかられまくるという状態。走るように歩く。しかし、最後の登りではズガを振り払う気力も、早く歩く体力もなくなってしまっていた。傑作は隊長のパンティストッキング。

これを履けばズガ対策は万全と言っていたが、めずらしがるポーター達には触られまくり、穴が開いて脱いでみれば見事に赤く染まっていた。今日の宿は、物置の2階。冷たい霧の中、風通しの良すぎる所だ。

8月23日 雨 →カウマダラ

今朝になっても相変わらずのガスの中。雨は強弱を繰り返すが、降り止むことはない。今日は、20人ほどのポーターの入れ替えがあり、荷物の再分配でもめたために出発が遅れた。しかし、シェルパニの可愛い少女達も加わって、ビデオを回す石川もうれしそうである。天幕地のカウマダラは、花咲く草原で晴れていれば気分の良い所なのだろうが、遂に雨の止むことはなかった。この冷たい雨の中、ポーター達はどうしていることやら。

8月24日 雨 →ムンプー

キャラバン中のメイン、シプトン＝パス越えであるが、ついに晴れることはなく、ヒマラヤの高峰は姿を見せなかった。雨の中、カルカの貧弱な小屋に入って、焚火にあたりながら羊番をしている少年からホットミルクをもらう。こんな寒い日、これだけが楽しみだ。隊長は早くも高度障害を訴え、胃の中のを上げてしまった。私も手足にしびれを感じる。今日の天幕地にもズガが多い。雨は我慢できるがズガはどうにかならないものか。



▲シプトン＝パスを越えるポーター達は石塚に草を供え、濃いガスのバルンコーラへと下っていった。

8月25日 雨～曇 →ネエ・カルカ

深夜もズガの強襲で落ちて眠れず、朝も朝で、止んでいた雨が降りだしてくれた。これも毎度のことと諦めるしかない。しかし、歩き出せば薄日も差すようになったし、何よりも今日の天幕地のネエカルカの草原にズガはいなかった。皆、干し物をしたり、身体を洗ったりと久々にのんびりとする。隊長は地元のおばちゃんを持ってきたロキシーが気に入ったようだったが、私とリエゾンはしかめ面になってしまった。

8月26日 曇～雨 →メラ

屏風岩の何倍、何乗もある岩壁群の中の河原を歩き出す。今日もリエゾンは、私にぴったりとついてくる。だが、さすがに高度も上がって、私がシェルパのフルバ・ギャルツェンと早足に歩くについてこれず、フラフラになってしまった。それにしても、まだマカルーもヒマラヤの白い峰も見えず、キャラバンの楽しみが半減している。

8月27日 晴～霧 →ヒラリーBC

途中の橋が流されてしまっているということなので、丸太を持った工作隊が先発する。今日初めて、マカルーが雲の中から姿をのぞかせるが薄ぼんやりとして、はっきりとしない。隊長より明日

のレストを言い渡されるが、私自身としては好調なだけに、気持ちがうずいて仕方ない。

8月28日 晴～霧 ヒラリーBC

村口は、ポーター達と共にBC往復。3人のシェルパとメールランナー、キッチンボーイはBCに今日から滞在することになった。残った隊長、石川、山本、リエゾン、サーダー、コックは外にシートを敷いて野点^{のびて}まがいの茶を楽しむ。今日はマカルーの南面もきれいに見える。大きくは感じるが威圧感がないのは、陽光を浴びてほのぼのとしているからだろう。午後には村口とポーター達が戻ってくる。ここまで頑張ってくれたポーター達と握手したり、「ダンニャバード（ありがとう）」と声を掛け、別れを惜しむ。

8月29日 晴～雨～晴

高所順化のために石川と山本はBCまで、隊長はその途中まで往復することになり、村口はヒラリーBCで休養停滞となる。それにしても、BCへの道は浮き石だらけだし、そこから中で岩雪崩は起きてるしで高所ということよりも、精神的に参る。とりあえずBCには、到着したが、帰路も道に迷い、その上に雨にも降られて散々だった。



▲カルカには牛が放牧され、ひさしぶりにのどかな場所にテントが張られた。

▼初めてマカルーが姿を現わした。おそろしく高く天を突き抜いていた。
(ヒラリーBCよりマカルー南壁)



8月30日 晴～雨～曇

全員で休養停滞。村口は、気持ちよく晴れている中を散歩に出掛けるが、帰りはやはり雨に降られてずぶ濡れになって帰ってきた。他のメンバーはせっせと手紙を書いていたが、後で考えると無駄な努力をしていたメンバーもいた。

8月31日 晴 ヒラリーBC→BC

1ヶ月をかけて、ようやくBCに入ることができた。ここまで長かった。BCは、シェルパ達によって整備され、石垣による立派な食堂も完成していた。BCでは、テントも一人一張りとしたので気楽になった。眺めも目前にマカルーがそびえ、ローツェ、エベレストを西に望み、背後にはパルンツェ、チャムランが控えているという岳人にとっての羨望の地であろう。5,300mにもなるとさすがに頭が重い、クライミングシェルパほど高所に慣れていないキッチンスタッフ達も辛そうである。

登 攀

9月1日 晴

食料のパッキング、個人装備のチェックで一日を費やすがのんびりとしたもの。シェルパ達はBC滞在も4日目となって、暇を持て余している。明日もパッキングの予定であったが、隊員4人で偵察に行きたいと、サーダーに持ち掛けると明日

はネパールの厄日だから行動を慎んで欲しいとのこと。

9月2日 晴

午前中はテントや酸素ボンベなどの点検、午後は暇なレストである。まだ、登山に対するシェルパの気持ち、あるいは隊長の考えもよく読めない。日本人とシェルパの間にずれが生じているような気がする。

9月3日 晴

北西稜にダイレクトに突き上げるリッジの偵察へ岡田と山本、村口と石川の2パーティーに分かれて偵察に向かう。私達は西壁の直下まで行くがとにかく歩きづらい。乗る石全ても浮き石という感じである。クレバスの多く気を使う。リッジは登れるだろうがそれまでがダルイ。結局、村口の偵察の結果もノーマルルートが一番ということになった。「急がば回れ」6,000mまでザイルなしで行ける利点は大きい。シェルパ達もそれを見越して、今日はノーマルルートのC1予定地に荷上げをしているのだが……。ところで隊長と石川はグロッキー気味。隊長は酸素を吸わされてしまった！私も頭痛はするがミエで何事もないように振る舞う。

9月4日 晴

村口、山本はC1までのキャリーアップ。それにしてもシェルパ達の何と早いことであろう。20kg近くを背負って、7時にBCを出発して12時前に帰着してしまう。それに引き換えて、私達は半分以上の荷で3時だ。いくら生まれ育ちの違いとはいえ、この差は何だ！シェルパ達に見くびられたくないものだ。

9月5日 晴

本日もC1まで全員でキャリーアップ。しかし、今日の私は早かった。C1まで3時間半。目に見えて早くなった。スペイン人を抜いていくのも気分が良い。それはそれとして、最初にC1に泊まるのは当然、自分だと思っていたら、村口は咳き込んで不調の石川と私を比べて、どちらにしようか“ナウ、シンキング”だと言う。何と信用のないことか。また改めて、自分の弱さを思い返してしまう。

9月6日 雪～晴

ネパールの吉日に合わせ、今日になってオープニングセレモニー。フランス隊のオパチャンと合同である。下の部落から上がってきたラマ僧は全然それらしくないが、アン・カミを初めとしてシェルパ達は飾りつけに余念がない。マカルーが雲の中でパッとしないがお経を聴いて、お菓子を食べて、シェルパ達と粉をかけ合って、はしゃぎ回って終わる。

9月7日 晴

シェルパを先行させ、村口、山本は昼まで休んでのC1入りである。一日休んでの登高が辛く感じる。村口と二人、ぼやき合いながら歩いていると、上から下りてきたバーバリアンクラブ（日本人の夫妻でマカルーII峰を目指している）と出会う。いろいろと話し掛けられるが答えるのも辛く感じる。へろへろになってC1に着けば、シェルパ達が TENT を張っていてくれたが、整地が不十分で誠に居心地が悪い。岡田、石川はBCよりC1を往復。

9月8日 雪～曇

C1は朝から雪。待機をしていたがアン・カミ

にせかされるように9時半に出発する。ヒドンクレパスを用心して、4人でザイルに繋がる。現れた雪壁はアン・カミがトップでルートを伸ばす。村口と山本はロープを後続するのみ。こんなことで良いのかという気も起こるが、さりとしてトップでバリバリと進む気にもなれず、すっかり任せてしまう。12時過ぎに降雪が激しくなり、C1に引き返す。岡田、石川はBCでレスト。

9月9日 雪～曇

モンスーンを証明するようにC1はまたしても雪、そしてガスも濃い。私は眠れなかった辛さもあって、「もうBCに帰りましょう」の連発だったが、その通りになってホッとする。BCに帰る途中、スペイン隊が我々の荷上げしたロープを使わせて欲しいと申し入れてくる。これだけ同じルートに各隊が集中すると面倒なことが多い。岡田、石川はBCにてレスト。

9月10日 晴

モーニングティーの時には晴れ渡っていた空も、朝食時にはガスってしまっていた。不可思議な天気の中、アン・カミ達はC2までのルート工作に出発。どうやら、スペイン隊には勝手な真似をさせたくないらしく、張り切っている。

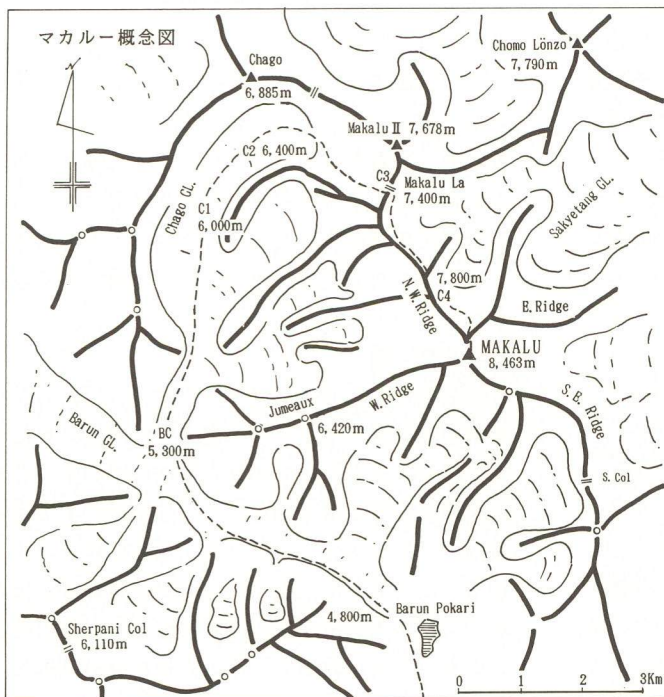
10時に岡田、石川もC1へ出発。快晴のC1は気温42℃を記録する火炎地獄となっただけ。村口、山本はレスト。

9月11日 晴

今日も村口、山本はレスト。しかし、アン・カミ達は今日もC2への荷上げの後、さらに上部へとラッセルしているらしい。「簡単なルート」に「優秀なシェルパ」というのも考えもので、何することなく登山が進んでいっている。我々のロープをたぐるのみになっているヨーロッパ人達もどう考えているのだろうか。岡田、石川はC1よりC2を往復する。

9月12日 曇

C2まで上がろうという気持ちでBCを出るが、相変わらず天気が悪い。C1までの行動となる。岡田、石川は



C1よりC2を往復した後にBCに下山。

9月13日 みぞれ

毎度の睡眠不足で好調ではないが、シェルパ達と共に2時間余りでC2に到着する。昼前にはC1に戻り、のんびりとする。岡田、石川はBCにてレスト。

9月14日 ガス～晴

ようやくのC2に入る。先着していたアン・カミ達は上部のルートワークへと向かっていたが、ニマ・テンパは何故か一人でフランス隊のテントを建てている。「それはフランス隊のサードの仕事だろ！」と村口に怒鳴られて、困った顔をしているニマ・テンパであった。昼食後、我々も上部に向かうが思ったほどルートは伸びていなかった。雪が深いためだろう。6,600m付近までトレースを付けて引き返す。岡田、石川はBCにてレスト。

9月15日 快晴

意気込んでの4時起きと言うより、またしても眠れぬ夜であった。ラーメンを作るが何せ時間がかかる、作ったところで食欲がない。6時にスタートするが太陽は9時半までチベット側であって、それまでの日陰は全く寒かった。それにしても異常に雪が多い。ここは越後か白山か。7,000m近くの標高で腰を超すラッセルは正直に参る。最も深い場所では、2人で50mのロープを2ピッチ張るのに2時間もかかるほどだ。フラフラになってC2に帰るが村口は、頭痛と視界が霞むことを訴える。岡田、石川がC1へ入る。BCにメールランナーに戻ったらしいが、日本よりの手紙のない事に全員が落ち込む。

9月16日 晴

昨夜の時点ではもう一度ルートワークに出る予定だったが、2人の疲労が濃く下山となる。途中、C2に向かう岡田、石川とすれ違うが、何とかマカルー・ラへのクローワールを突破してもらいたいものだ。ところでこれだけの隊がありながら、今日ルートを伸ばした隊はないようだ。全く、昨日のスペイン隊にしても、ラッセルを必死でしている我々にロープだけを渡して帰ってしまう始末。

9月17日 快晴

すっかり寝て過ごす村口、山本のレストの一日。

岡田、石川はスイス隊と共にルートワーク。石川はクローワールより右のリッジに出た7,150mまで達したらしいが、疲れきっているようだ。それより、何よりC2のテントがカラスの猛攻にあって、相当の食料が食い荒らされたようだ。特にラーメンの類は全滅したらしい。

9月18日 快晴

洗濯、洗髪、アイゼンの修理、オーバーシューズの改良でレストの一日を終える。岡田、石川もC2より下山、久々にBCに4人のメンバーが揃う。4人の順化もまずは良好。アタック体勢のスケジュールを決定する。BCも徐々に寒くなってきている。モンスーン明けが近いのかも知れない。

9月19日 快晴

BCよりC2まで一気に入るが、やたらと遠く感じる。C1まで3時間半、C2まで2時間半なのだが、岡田、石川はBCにてレスト。

9月20日 快晴

今日こそはマカルー・ラまでのルートワークを完了させたいという気持ちで早朝C2をスタートし、トップで快調に飛ばした。しかし、クローワールよりリッジに出るデポ最終地点より、フランス隊のシェルパと村口が先行すると、すっかり遅れてしまい、マカルー・ラを目前にして引き返してしまった。マカルー・ラへは、追いついてきたスイス隊メンバーの活躍もあって、ルートワークを全て終えた。岡田、石川はBCにてレスト。

9月21日 快晴

村口の疲労も激しく、本日はC2にてレスト。最初はC1まで往復して、不足してきたガスカートリッジや食料を上げてこようなどと言っていたが、結局は動かず。それにしても、アン・サルキは異常に早い。C2からマカルー・ラの往復がわずか5時間でしかない。毎度々々の彼の強さには恐れ入る。岡田、石川はBCにてレスト。

9月22日 快晴・風強し

マカルー・ラのC3入りであるが、村口はまたも睡眠不足であるらしく、機嫌が悪い。ペースも遅い。リッジに出るところで、また1時間近く待つが、ここよりは例によって私がペースダウン。



▲マカルー・ラへは深い雪に苦しめられた。

夕暮れ近く、強風のマカルー・ラにへろへろになってたどり着くが、またしてもカラスに食料が荒らされていた。そして、テントはこれから建てねばならない。テントごと飛ばされかかること数度にして、やっとの思いで設営する。すっかり、消耗して食欲も失せてしまったが、酸素のおかげで安眠できた。岡田、石川はBCよりC2に入る。

9月23日 快晴

スイス隊の後を追ってノロノロと出発する。今日はBCまで下る予定であったので、7,600m付近で引き返す。頂上まで予想以上には近くに感じたが、何と言ってもチョモレンゾなどチベットの山々を美しく感じる。C3より下る途中で岡田隊とすれ違う。隊長はかなり参っている様子で7,250m付近よりC2に戻る。石川はC2よりC3を往復。村口はBCまで下るが、山本は遅れてC1に一人で泊まる。しかし、ここに常備したシュラフが薄く、寒い思いをした。

9月24日 快晴

食事は取らずに下り、BCでリンジの焼いてくれたパンケーキを遅い朝食としたら、すぐに昼食になってしまった。BCに下りると毎回、食べ過ぎのために下痢をしてしまうが、今回も例に漏れ

ず。石川はニマ・テンバラと共にC3に入り、岡田はBCに下山。村口はBCでレストの1日。

9月25日 快晴

パーバリアンクラブは今日、マカルーII峰に登頂したらしい。昨日マカルーII峰に登頂したスペイン隊は、パラパントで空を舞っている。石川がC3より下山、メンバーの揃ったBCで酸素器具の扱い方を確認する。アタックが刻一刻と近づいている。何とか登れそうだという気持ちだが……。好天でも祈ろう。

9月26日 快晴

アタックに向けて、最後のレストの一日。しかし、まだまだ身体がだるい。BC下の池の水が涸れて、水を汲みにいくキッチンヘルパーもいっそう大変になった。

9月27日 快晴

村口、山本、アン・サルキはいよいよアタックへの出発。ニマ・テンバが安全を祈願して、首に赤い紐を掛けてくれる。しかし、食べさせられたまじないの黒砂糖(?)は、気分が悪くなって吐き出してしまった。これは神に見放されるかも…? 順化した快調なペースでC1まで登るが、C2までとなるとやはり遠く感じる。岡田、石川も最後

の休養日。

9月28日 快晴

疲労が残って、気乗りのしないスタートである。バテて遅れるばかりなので、思い切って一人でC2に戻る。村口には、申し訳ないがアン・サルキと二人で第1次アタックを行ってもらった。午後には、アン・カミ、フルバ・ギャルツェン、石川、岡田と第2次アタックのメンバーが間隔を置いて次々とC2に登ってきたが、皆、いるはずのない私の姿に驚く。村口、アン・サルキはC3に入る。

9月29日 快晴

昨日の雪辱を果たそうと張り切って歩くが、いつもの通りにリッジに出る頃よりペースダウンしてしまう。隊長は幻聴を耳にしながらも、マカルー・ラに這い上がってきた。しかし、これ以上での行動は諦めるとのこと。村口とアン・サルキは8,000m付近までルート工作をしてC4に戻りたい。

9月30日 晴

今日アタックの村口とアン・サルキだが、朝5時よりオープンしているシーバーに何の連絡も入らない。もしかして……。と嫌な予感がして準備も気が進まない。しかし、10時にアン・カミ、フルバ・ギャルツェンがC4へ出発。私と石川も30分後に後続した。その直後、初めて村口から入感。やはり雪が深く、前進できないらしい。約3時間でリッジの雪を削って設けられた狭いC4に到着する。4人用テントだが4人で使用するのには余りにも窮屈である。装備や食料の收拾もつかずゴタゴタとするが、石川は出口の脇に陣取ってコマメに作業している。シェルパ以上にシェルパしている。夕刻、村口らが帰ってきたが猛烈なラッセルのため、8,200m付近が最高到達点となったらしい。岡田はC3で待機。

10月1日 晴～ガス

午前12時半の起床。皆、ゴソゴソと起き出すが私は身動きもとれない。茶が沸かされ、私はビスケット、石川とアン・カミはチャパティ、フルバ・ギャルツェンはツァ

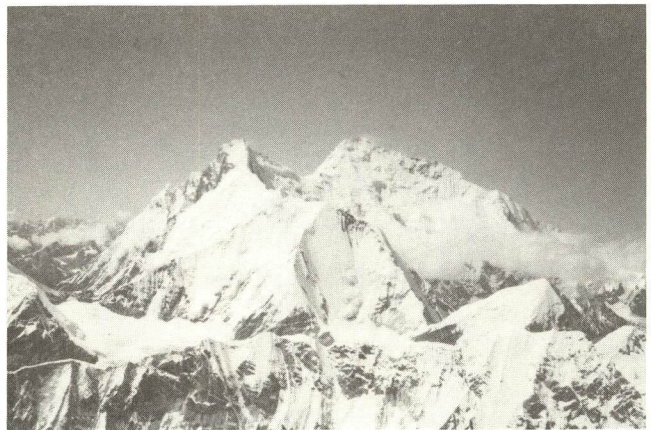
ンパの朝食をとる。3時過ぎ、先行したシェルパ達の後を追って出発する。石川は準備に手間取り、さらに遅れる。

1時間ほどで村口らが設置した3本のFIXロープの末端に到着する。氷混じりの雪壁をロープを頼りによじ登るが、アン・カミは足の指が冷たいとしきりに訴える。何とかなだめすかしていたが、2ピッチ目の途中で「ヤマモトさん、ソーリーね」と言い残して、引き返してしまった。

それからはアン・カミの背負っていた酸素ボンベも私の荷としたが、負担が増えたせいか登高が辛くなる。8,000m付近のFIXロープの終了点で仕方なく、アン・カミが持っていた未使用のボンベを私のマスクに装着し、私が使用していたボンベをデポする。しかし、高所での慣れぬこの作業も精神的な疲労を増す原因となった。

酸素を吸っても息は切れるし、息苦しくてマスクを外しても、当然、呼吸は辛い。「大丈夫ですか？ ふらついてますよ」と後ろを歩く石川から声を掛けられる。自分でも感じていたことだが、後輩に迷惑はかけられないと思い、下山を決意する。快調な石川とフルバ・ギャルツェンだけが登頂の可能性も高まると考えられた。

8,000mから夜が明けきったヒマラヤを下る。チョモランマ、ローツェ、チベットの山々をフィルムと目に焼きつける。振り返るとクーロワールの入口に動く二つの点が確認できる。C3で岡田、村口に出迎えられる。「初めてにしちゃ、



▲ローツェとエヴェレスト

上等だよ」

結局、石川らも雪質の悪いクーロワールの突破に時間がかかり過ぎ、8,300m付近で敗退となった。岡田と山本はC2まで下降し、村口はアン・カミと共にC3に残った。

10月2日 晴

個人装備の荷下ろしに四苦八苦しなから、BCへと下る。再アタックに向かうスイス隊メンバーには「グッド・ラック」と呼びかける。石川とフルバ・ギャルツェンは村口、アン・カミのサポートを受けてC4よりC3に下る。

10月3日 快晴

フルバ・ギャルツェンの雪目と強風によってC3の4人の下山が遅れたが、BCに全員が帰着した。久々のにぎやかなディナーで無事を祝福しよう。

10月4日 晴～小雪

大千しもの大会。テントなどの器具がBC中に広げられる。今日のマカルーの雪煙はすごく、笠雲のようになってしまう。これでスイス隊も登頂断念か。

10月5日 曇～雪

マカルーも姿を現さない、肌寒い一日。頭の中は、南の島のことばかりを考えている。

10月6日 晴

夕方、ごみを燃やしているとスイス隊メンバーに写真をさかんに撮られた。どういうつもりなのだろうか。遅れていたポーター達は夜になって、やっとBCに上がってきた。



▲キャンプを撤収し、BCへ向う
右後方はバルンツェ(C2にて)

第1次アタック

村口 徳行

9月28日

普段の山本なら、平らな場所は馬鹿みたいにとばすはずだが、今日はまったくペースが上がらない。

「おまえ、調子が悪けりゃ下りろ！ 上に行ってもアタックできねえぞ！」

「もう少し行ってみるつもりだ」

と短い会話。しばらくして悲しい目をした山本はC2へ戻っていった。

ルートは我々が工作した時とは比べようもなくしっかりと踏み固められ、順化もできているせいで大分らくにマカルー・ラに到着した。先日、建設で来た時は強風に吹かれておもしろくなかったが、今回は大した風もなく、気分も良い。

9月29日

ここは朝日が早く当たる。なんて暖かくすがすがしい朝なのだろう。風さえ吹かなければ滑落する心配もなく、広く快適な場所だ。

C4へはマカルーを正面に緩い斜面を登ってゆく。上空には太陽のまわりに気味の悪い虹がかかり、少々気にかかる。C4直下で天候が崩れ、風雪の中を最終キャンプにたどりつく。濃いガスで明日のルートがわからない。ルートをはっきり決めておく必要がある。この先はルートをよく観察しておかないと、つまらぬ所で時間をロスすることになる。深夜スタートするためには、少し晴れてもらわないと不安だ。水を作り、シェルパとくだらない話をして時間をつぶす。

3時頃、視界がはれたので工作に向かう。少しでもラッセルしておけば、明日の行動が楽になるはずだ。しばらくは交替でラッセルをしながらトラバースを行ない、露岩を回り込んでセラックに突き当たった所で急斜面のクーロワールを直上する。2ピッチロープを張り、薄暗くなる頃C4に戻る。

飯を作り、明日の準備をしている間に、もうほとんど眠る時間がなくなった。シェルパは「普段

たくさん寝ているから1日くらい寝なくても問題ない」となかなかうれしいことを言ってくれる。4人天に2人という理想的な環境でシュラフに入る。

9月30日

12時半に起床。眠った気がしない。朝食を簡単にとり、2時40分頃C4を後にする。星が瞬き、ピリピリする空気の中、数時間前につけたトレースに導かれ、真っ暗の中を無言でトラバースする。もうすでにトレースは埋まりかけ、所々ラッセルだ。シェルパの靴を修理したり、突然の腹痛に襲われたりしてのトラブルはあったものの、昨日張ったロープをユマーリングし、さらに20m程つけ足して夜明けを迎えた。7mmφ20mのロープを結び、セラック帯へトラバースを始める。ピッケルが氷にぶつかって深く入らない。アイゼンが雪に吸収されて歯が滑る。どうにも不安定な斜面を抜け、いくつかセラックをまわり込んで予想外に早くトラバースを終了した。そこからいけなかった。一步踏み出すごとに表面の雪が割れ、ズブズブと潜る。ペースがいきなり落ち、疲労だけが増えてくる。これ程、近くに見えていながら、なんと遠いのか。2人でラッセルを繰り返すが、まったく進まない。小さなクレバスが越えられず、左へ左へとトラバースを続け、岩壁にぶつかった所で直上し、ようやく初登ルートของ ルンゼ下部に着いた。ここでまたしても我々の望みは砕かれた。もう少しましな雪質に変わるかと思っていたが、ダメだった。斜面は急になったが、相変わらず深いラッセルは続き、ほとほと嫌気がさしてくる。上を見れば、すぐ手が届きそうな距離にマカルーの頂がある。しかし、我々のこの遅々とした歩みはどうだ。もどかしいぐらいにはかどらないラッセルと、トランシーバーからは

岡田の「もう、下りろ！」という非情な声。ルンゼをしばらく直上し、ロープ、O₂、ガチャをデポして下降する。頂上は山本、石川にゆずるとしよう。暗くなる前にC3まで帰りたい。急がなければ…… 明日のチームがもっとも最短でここまで来れるように、違うルートを下降し、セラック帯からからはトレースをたどって、長い長いトラバースを終え、C4に帰る。山本・石川は元気そうだ。ルートを説明し、略図を渡し、あとは「がんばれ！」とだけ言って、C3へ向かう。自分の影が斜光でチベット側へ大きく映る頃、穏やかなC3に着く。岡田に熱いお茶をもらい、頭痛でしばらく転がっているうちに長い一日が終わった。



▲9月29日、C4からルート工作へ向う先行するアン・サルキ。セラック手前にて。

第2次アタック

石川 一郎

9月30日、C4へ入る。体調はすこぶる良い。「明日、天気が良ければ必ず頂上に立つことができるだろう。」と思う。

前日アタックに向け出発した村口氏、山本氏、アン・サルキに続き、9月28日、2次隊として岡田隊長、アンカミ、フルバ・ギャルツェンと共にベースキャンプを出発する。キャラバン中の右腕のしびれ、ヒラリーBCでの頭痛も今はなく、精神的にも落ちついている。これまで何回も通った道を、いつもより意識的にゆっくりと、体調を整えながら、いつもの通り、いつもの場所で休みながら進む。明るいうちに、今日の目的地C2まで着けば良いのだ。まして明日は約1,000mを登らなければならない。意地になってゆっくりと進む。不思議なものでこんな時は、自分が思っている程にはペースも遅くはない。余裕でC2到着。

前日C3へ上がっている予定の山本氏と合流。C3への途中より引き返したとの事。水もたっぷりできており明日に備えゆっくりと過ごす。

翌、9月29日、今日も昨日の通りゆっくりと登れば良い。スペイン隊のC2よりはユマーリングのみだが少々傾斜があり、途中ではちょっと休む気にはなれない。クーアールを外れ、尾根にでたところでゆっくりとする。この後もただ登るだけだ。C3到着、少々疲れたかなといった感じ。ここは7,400m、この疲れはぬけるかどうか、そんなことが頭がよぎり、少々弱気になるが、すぐに忘れる。

翌朝起きてみれば疲れなど残っていないし、そんなことは考えもしないほど調子は良い。今日はいよいよラストキャンプへ入る。しかもあと400m程。時間的にもそれ程かからない。自分はC4まで今まで一度も行っていないが順化には何の不安もない。絶好調だ。ゆっくりと準備し出発。しかし岡田隊長はここを最高到達点と決め、

残る。天気も申し分ない。明日もこの状態が続く事を祈りながら登る。

今日アタックをかけている村口パーティはどこまで行っただろう。

C4到着後に村口パーティは、まだ前進中であることを交信で知る。シェルパの靴の破損などで時間がかかり、また深雪で苦しんでいるとの事。行けるだけトレースを延ばして帰るとの事だ。もう時間的に登頂は難しいだろう。ただ頭がさがるのみだ。

降りるとの交信の後、外に出て上を見ていると速くに人と思われる点を見つめる。すぐにも戻って来そうに思うがなかなか近づかない。ここC4には、私達がいる。彼らはC3まで降りられるだろうか？ このままだとC3までは日没との競争になりそうな気がする。ようやくC4へ着く。元氣そうに見える。まずは一安心だ。早く下へ降りてもらったほうが良いとは思いつつも、上部の状況を、教えてもらう。酸素、ザイルのデポ地点、ルート的事、聞きたい情報は山ほどある。

村口パーティが降りて行った後、再びテントの外に出て上部を望む。雪が多いようだ。しかしトレースは途中までついている。体調はすこぶる良い。問題は天候だけだ。しかしこの分なら問題ないだろう。「明日は必ず頂上に立つことができるだろう。」と思う。

C4、ここに4人入るのは少々厳しい。ベースキャンプは個室だし、今までどのキャンプでも、ぐっすりと寝て来たが、これではゆっくりと寝ることなど無理そうだ。学生の頃の冬山合宿を思い出す。装備、食料を自分の身体の下に雪面のデコボコを考え、少しでも平になるように敷き、その上にシュラフを広げ横になる。隣りの人間と身体が重なり、寝返りも思うままにうてない。30分に1回、酸素マスクの中に付く水滴をふき取り、1時間に1回程度時間を確かめる。気にするなと思う程、気になってしまう。誰かがやはり時間を確かめている。寝ているのか起きているのか、うつつの中で過ごす。午前0時を回る。そろそろ起きて準備しなければ。もう誰も寝ているとは思え

ないのだが、誰も起き上がらない。アンカミが声をあげると全員が応じる。しかし全員が一気に身を起こすわけにはいかない。狭いのだ。テントの内側は霜でいっぱい、少しでも動くとパラパラと霜が身体中に降りそそぐ。一人ずつシュラフから這い出し、整理を始める。

もどかしい程、ゆっくりとした動作だ。時間の経過だけが速く感じる。空腹感もない。このまますぐに出発したい気分だ。テルモスの中の紅茶を飲み、アンカミに勧められるままにツェンパを口に押し込む。一口入れると腹が刺激されたのか、食べようという気がおこるが、実際に腹におさめたのはごく少量だ。

身の回りのものを身につけ、テントの外へ出る。風はそれほど感じない。登頂日和のようだ。

アイゼンを装着しようとするも、左足は簡単に決まるが、右足はなかなか決まってくれない。あせりを感じ、思わず「チキショウ!!」「どうなっているんだ!!」の言葉が口を出る。

アタック態勢に入る前のBCであれほど慎重に調整して来ているのに、なんて事だ。あせりはつもの。なんとかバネの部分の少し緩め、ようやく装着する。

トップはすでに前進している。ますますあせる。酸素を準備するうち“シュー”と酸素が吹き出す。「何をあせているんだ」「落ちつけ」ヘッドランプのリチウム電池を万が一に備え、入れ換える（下山後、山本氏に言わせると、一つを反対に入れていたとの事）。

身の回りの準備が終わる頃には、自分を除く全員が前進している。昨日までは、トップで出発するつもりでいたのに一番最後になってしまった。一步を踏み出す。取り残される。追いつかなければ。

しばらくはトラバースだ。ヘッドランプに照らされるのは前を行った人のトレースのみ。それも完全なトレースではない。早く追いつかなければ。今、冷静に考えればバカなことだった。実際の距離はそれほど離れてはいなかったのだが、あせりはつもの一方だ。

前の3人が、前日村口パーティの張った

フィックスを登っているところへ、追いついた。大した時間ではなかったかもしれないが、“ようやく”との感じでほっと一息つく。

あせりはなくなった。最後尾は、1ピッチも上にいないようだ。どうせ今すぐ登ってもすぐに追いつき、途中で待つことになる。

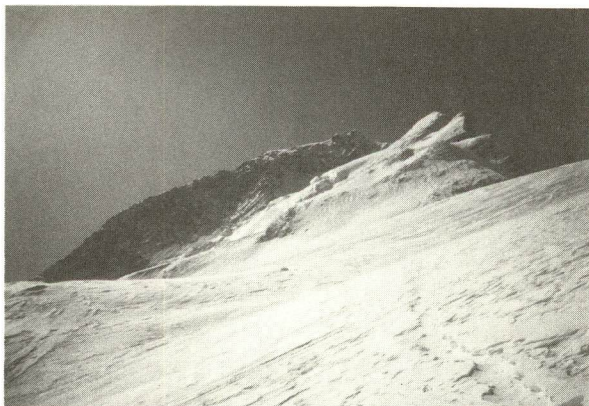
ここはそれほど安定してはいないが、とりあえず休む事はできる。「そうだ、落ちつこう。」まだ夜も明けていない。ゆっくりやればいいのだ。斜面に背を向け、まだ暗い景色を眺めていると、今まで無理に落ちつこうとしていたことも次第に忘れていった。

「よし、行こう。」正面を向きユマールを伸ばす。まだ、トップのヘッドランプは、それほど離れてはいない。今までとは逆に追いつかないようにと思いつながら登っていく。フィックスが張ってあるとは言え、結構いやらしい。

前が落とした雪の下はカリンカリンの氷や岩だ。打ち込んであるプロテクションも信用できない。

フィックスを抜ける前に追いつく。追いつくとアンカミが降りてくる。どうしたのかと思っていると、足先に疼痛があり降りるとの事であった。

登りきると再びトラバース。傾斜はあるがなんてことはないトラバースが続いた後、ふんわりと乗った雪の下がカチカチの斜面が数メートル。ほんの数メートルだったが、やけに緊張した。このあたりで左手前方がオレンジ色に染まり始め、夜明けがすぐそこまで来ていることを知る。時計は見なかった。ここまでが早いペースなのか、遅いのかよくわからなかった。



▲技術的な問題はなかったが、自然のもつ偉大な力には勝てなかった。

しばらく前進すると前を行く山本氏の足取りに不安を感じた。言葉に出そうか、出すまいか、そんな事は自分が判断すべきものだ。しかし6年前の事が頭に浮かぶ。

「山本さん、大丈夫ですか？ ふらついてますよ。」山本氏は振り返り、そのまま下降を始める。後姿を見ながら、何かうしろめたさを感じる。しかし前へ進む。前日のアタック隊のトレースが残り、今までのところそれ程の苦労はない。2m程の段を越えたところで、この日初めて2人そろって休みを取る。

天気は快晴、風はない。まだ時間も早い。頂上はそのに見えている。「行けるぞ」確信は深まる。

前年、ベルニナが登ったルートは、あまり良いとは思えない。雪も深いし前日のトレースを追うべきだろう。しかし同行のシェルパは、前年ベルニナと同行していたせいか、右側のルートを主張する。経験者に従うべきだろうか、少々迷うが見た目には、上部で苦労しそうな気がする。やはり自分の考えが正しそうだ。トレースを追う。頂上から左へ延びる稜へ向かってしばらく行くと、トレースはクレバスによって消えた。1次隊はもう少し上まで行っているはずだ。これを越えたのだろうか？ 1mもない。左数メートルのところには、橋がかかっている。右へ迂回するとすれば数十メートル。どうしようか、時間はまだ充分ある。バカな無理はやめ、多少雪は深くても迂回しよう。思った以上にラッセルは厳しい。浅くて膝上、深いと腰ほどになる。必要以上と思われる程、右へ進み向きを変える。前日のアタック隊のトレースに戻ろうとするが、もうそれはここからでは確認できない。とりあえず真っ直ぐ左へ落ちる稜のコルを目指そう。ラッセルは徐々に深くなる感じだ。口に着けている酸素マスクがうっとうしくなってくる。サングラスがくもって前が良く見えない。ギャルツェンも同じように感じているらしく、サングラスをはずしている。自分は雪盲の方が恐ろしく、マスクをはずし苦しくなると口にあてながら歩く。前日のトレースに戻り、ようやくといった感じで酸素、ザイルのデポ地点に着く。時間は時計を見なかったせいか少しも気になって

いない。とりあえず交信をする。ここからは稜へ向け登るのみで、頂上もすぐそこに大きく見えている。あともう2時間といったところだろう。

傾斜は急になり、雪もひどく深い。傾斜のせいもあるだろうが胸まで埋まることもたびたびだ。加えて雪の薄いところは下がいやらしい。

逆層の岩でホールドも見つけにくい。フィックス用のロープは途中で使い果たし、ザイルを組んで登るが、手持ちのピトンはいたって少なく、スノーバーはなく、思うようにプロテクションも取れないため、結構緊張する。自分ではまだまだ早い時間だと思い、もうかなりの高度まで来ていると思っていたが、予想以上に時は経過し、高度はそれほど稼いでいなかった。クーロワールを抜けたと思いきや交信をする。後は、この稜を上へ行けば頂だ、と思って話すと、下から見るとまだ稜まで達しておらず、時間もこの100m程を登るのに4時間もかかっていることを知らされる。

時計を改めて見る。酸素の残量も確認する。自分の酸素はもうほとんど無いと言ってよい。

このまま行けば下降は夜になるだろう。しかし調子は絶好調だ。パートナーに聞いてみよう。返事はOKだ。しかしこの1ピッチ手前で彼は、手に持っていたザイルを落とした、幸い50m程で止まったが……。自分自身もこの20m程手前で2m程が越えることができず、もたついた。再び6年前のことが頭に浮かぶ。「もう限界なのかな？」と思いながらも、まだ諦めきれない。

「ここで降りたら、これで最後ですよ。」

「……」何と言われたのか覚えていない。

もう少しだという気持ちと、もう一步でも上へ行きたい。たとえ頂上まで行けなくても、と短い時間だったがいろいろと考える。

しかし声に出した言葉は、「降ります。」だった。正解だったと、今は思うが残念だった。

言葉に出したとたん気が抜けた。1ピッチ降りると、酸素もなくなった。荷を軽くしようとポンベはその場にデポした。それでも何かふらふらする感じがする。途中でシェルパの酸素を一呼吸もらい、前日デポしてあった酸素へ着きセットし、

口にあてると一心地つく。やはり酸素の力は大きい、とつくづく感じる。まだ、日暮れまでは時間がありそうだ。こんなところで事故ったら笑いものだ。ゆっくり降りよう。こんなに遠かっただろうか。すぐC4だと思っていたのに。シェルパとも大分離れてしまった。時々立ち止まって振り返ってくれるのをたのしく思いながら、ゆっくりと進む。幸い、まだ明るいうちにC4へ帰り着く。

終わった。明日はBCへ向け降りるだけだ。テントに入り、EPIの青い火を見ながらそう思った。

帰 路

山本 修

10月7日 晴 BC→ジャックカルカ

すっかり寒くなったBCを出発する。登頂断念以来、振り返る気にもなれなかったマカルーだが

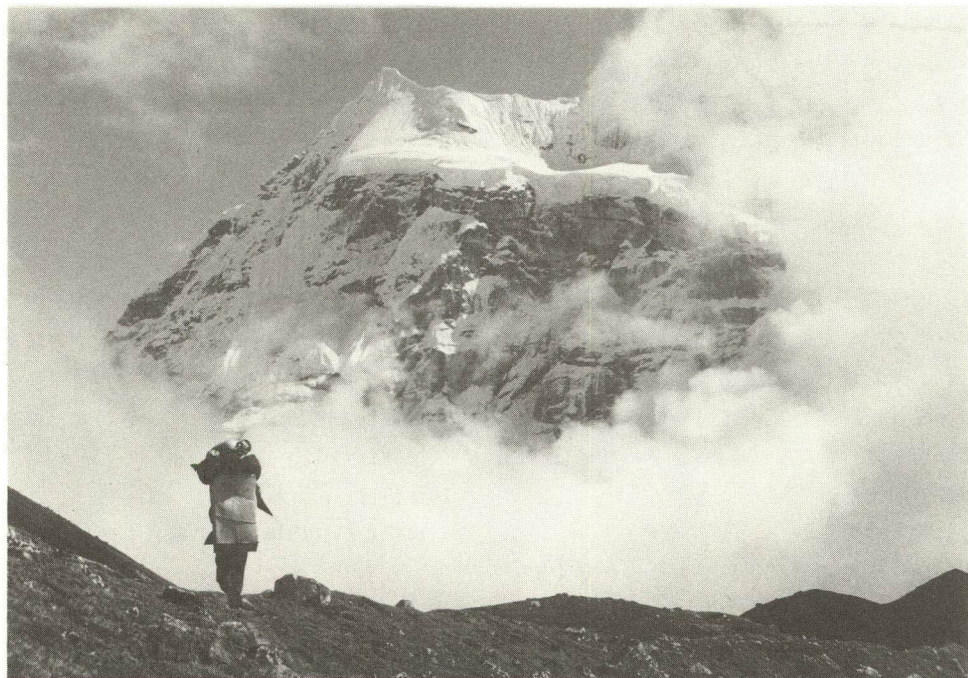
離れるのは何とも心残りである。しかし、あれだけ前もって暇がありながら、いざ出発となるとごたつく。また、ポーターも35人では少なかったようで、若いナイケも自ら大きな荷を背負っていた。ジャックカルカはひたすら遠く、全員が到着したのは日没の後であった。隊長お気に入りの細身のシェルパニもサーダーにサポートされて、ラストの到着であった。

10月8日 晴～小雨 →ムンブー

私は今日もリエゾンにピタリとマークされる。まるで護送されているかのようだ。「振り向けばシュレスタ・ジー」高所で衰弱したメンバーを尻目にスイスイと歩く。私も辛いが意地になって歩く。救いだったのはムンブクで今日の行動が打ち切られたことだ。

10月9日 晴～曇 →タシガオン

ポーター達の主張で今日の行動予定はセドアまで。これは、往きの3日分にあたる。にもかかわらず隊長の出発はのんびりとしたもの。私とリエゾンは早足で歩き出す。今日こそは彼を引き離そ



▲来る時のキャラバンでは見ることのできなかった山々が次々と現われた。

うとシプトン＝パスまで1時間余のハイペースで飛ばすが、その下りで追い着かれる。まったくのんびりとさせてもらえない。カウマダラで何とか振り切ったが、セドアまでだと思おうとウカウカともできずに休みもしないで歩く歩く。タシガオンでシェルパ達が休んでいるかと思ったが誰の姿もなく仕方無しにまた一人で歩く。忌まわしいズガに再会し、ひえ畑の中で道を失いながらも月明かりのセドアに到着する。先着していたシェルパ達でさえ、座りこんで愚痴をこぼしている。ポーターも大半がたどり着かず、質素な夕食となった。私の個人装備も届かず、アン・カミにシュラフを貸してもらおう。隊長達の到着を待って、テントの外にキャンドルを灯すが遂にやってこなかった。

10月10日 晴 →セドワ

10時頃、リエゾンを先頭に隊長、村口、石川、サーダー、ポーター達が下りてくる。やはり、昨晚はタシガオンに泊まったとのこと。私達は出発の準備もしていたが、今日はここまでとなる。ポーターをここで入れ替えるらしい。良い休養になった。隊長の誕生日を祝うわけではないが今日は赤飯（せきはんではない、あかめしである）。

10月11日 晴～雨 →ムレ

昨日、ビールとウォッカに大いに酔った石川は、「イシカワさん、ダイジョーブ？」とシェルパ達から盛んに声を掛けられている。アルン河まで一気に下り、ヌン、CSのムレまで登り返す今日の行程も長い。CSは広々とした草原だが、またしても雨でズガが湧いてくる。

10月12日 雨～曇 →カンドバリ

雨の中を歩き出す。案の定、頭に、首にとズガにたかられる。しかし、元気がないようで血は吸われない。隊長は冷えたビールを思い浮かべて、珍しく張り切って歩いている。カンドバリでは久々にロッジに泊まる。

10月13日 晴 →カーレ

ツムリンタルに到着、これでもう歩かなくても済むと思っていたが、カトマンズに飛べるのは3人だけということ。予約で一杯らしい（一時は

席が全く無いということで、隊長はショックの為に黙りこくってしまった）。協議の結果、岡田、膝を痛めた石川、リエゾンがフライトし、村口と山本がポーター達と共にヒレまで歩くことになった。ヒレへと歩き出せば、だんだんと南国の雰囲気。宿泊地のドムコタでは、私達は南京虫を恐れてテントに寝たが、シェルパやポーター達は壁が全く無いわらぶきホテルの2階でござこ寝していた。

10月14日 晴 →ドーレ

今日もアルン河に沿っての長い行程であるが亜熱帯の田園の中、水牛の水浴びに足を止めたり、大きなポリタンクを背負って灯油を買いに行く人達を追い越したりとこの街道も賑やかになって楽しい。特に往きに雇ったポーター達と出会い、声を掛けるのは楽しい。彼らのほとんどが今度は白人のトレッカーと共にナムチェバザールまで行くという。

10月15日 雨 →ヒレ

正真正銘の最終日なのにまた雨である。それもヒレの手前ではドシャ降りになる。全く雨季は終わったのか、終わっていないのか。そして、往きのナイケ「すまけい」が経営するドマ・ホテルでキャラバンは終わった。お世辞にもきれいではないが活気のあるホテルではある。シェルパ達と地酒のトンバを飲んで労を労う。岡田、石川はカトマンズに帰着する。

10月16日

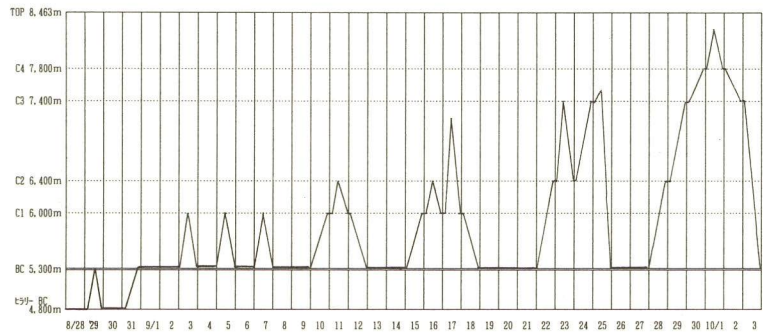
7時過ぎにチャーターしたバスでヒレを後にする。積んだプロパンボンベからガスが漏れ、その匂いに皆気分を悪くするが、村口がそのボンベを大量の荷の中から掘り出し、バルブを締め直して事無きを得る。ダーランバザールでランチを取ると日暮れまでノンストップ。そして、夕食後もバスはひたすら走った。

10月17日

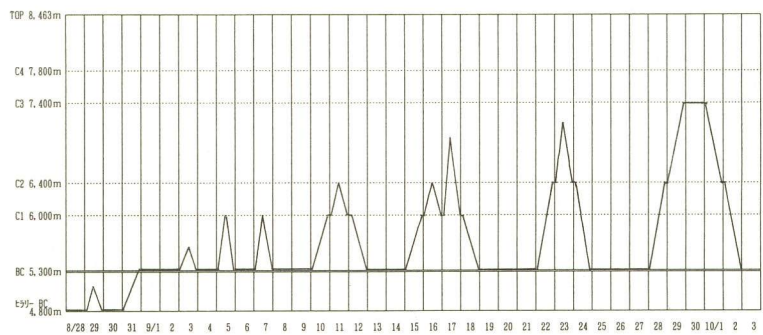
窮屈なバスの中、尻の痛さも限界に思う朝6時半、カトマンズのコスモトレックに到着、解散とする。インターナショナル・ゲストハウスで岡田、石川と朝食を共にする。

個人別行動表

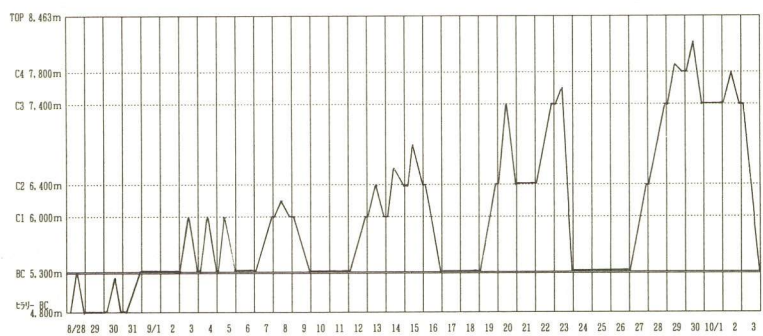
石川一郎



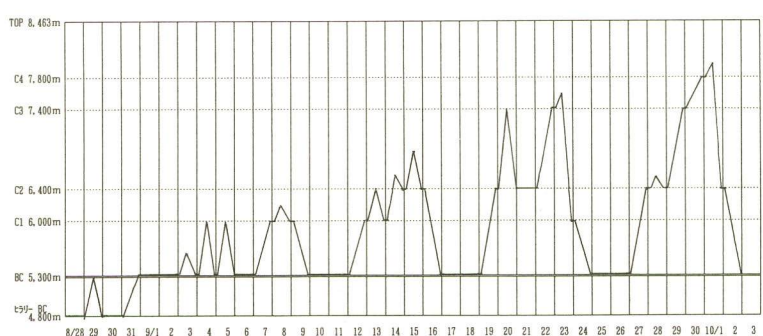
岡田貞夫



村口德行



山本 修



装備・食糧・医療報告

装備報告

村口 徳行

天幕／高所用としてC4に1張、C3に2張、C2に2張、設営した。C1及びBCは、キャンピング用テントを使用した。BCはすべて個人使用とした。

登攀具／フィックス用ロープ（ダンライン9mm×50m）を40本(2,000m)用意した。他隊の提供を受けたりしたが、1,500mぐらいは使用したと思う。アンカーにはほとんどスノーバーが使われた。ハーケン類はスクリューを堅い氷に数本使用程度であった。

燃料／BCにはプロパンボンベ12本、C1以上はEPIガスを使用した。総数100個をそれぞれ人×日数で割り出し、各キャンプに分配した。

酸素／AMPボンベ15本、セキユール8本を持参し、睡眠用としてC3より上で、行動用としてC4より上部で使用した。使用数としては、AMP12本、セキユール2本でおさまった。

*

装備に関しては、事前に作った計画にほぼ近いものが得られ、無駄のないものだった。天候が安定していたので、破損や損失などもなく、充分快適な生活が送れた。ただ、C2で鳥によって天幕が破られ、中の食糧を食われるという事故が起こった。注意しないと、危険に身をさらすことになる。特に高所においては、そういったつまらない原因で行動に支障をきたしたりするので、対策を立てておく必要がある。

荷下げのことを考えると、いかに少ない装備で登るかということが重要なポイントになってくる。不足しては困るが、正確な数量の割り出しや、計画的に使用することにより、装備を減らすことが可能だと思う。今回、その点では、少し甘い面があった。せっかく荷上げた物を、効果的に使用することなく、また下ろすことは実にばかばかしいことである。

食糧報告

山本 修

全ての面において簡素化を計ったこの隊では、細かな食糧計画も立てることはしなかった。また、現在ではカトマンズでも味噌や醤油などを含めてかなりの食品が入手可能であることから、日本からの発送も最低限に留めた。その内容は高所食用のα米、ジフィーズ食品、長期保存可能な生麺、餅、お茶漬けの素、ふりかけ、梅干し、海苔の佃煮、チューブ入りのワサビやカラシ等である。

キャラバン、BCでの食糧計画については、コックが食品とその量をリストアップし、購入の際にも私達は現金を揃えるのみで、ごく一部の嗜好品を買いたしたに過ぎなかった。キャラバン中も鶏、羊肉が現地調達されカレーの具やローストチキンになった。また、ジャガイモやトウモロコシ、バナナが購入できたほかにも、たか菜を摘み取ることができ、その油炒めは日本人に大好評であった。これらの野菜類やヨーグルトは下のカルカ(牧草地)、村の少年たちによってBCにも何度か運ばれ、食卓を賑わせた。豊富に準備したせいか、ダル(豆スープ)、ご飯、パスタ、オムレツ、カレーにデザートにはフルーツの缶詰めと続く夕食は苦痛の時でもあり、「アリ・カティ、アリ・カティ(少しだけ、少しだけ)」と言ってコックの盛り付けを減らすのが常套手段となってしまった。

医療報告

山本 修

C1以上での朝、夕食は基本的に日本から持参したものを食べたが、シェルパたちは荷上げたインスタントラーメンや α 米以外にも現地食を用意していた。行動食はカトマンズで購入したチョコヌガー、ピーナッツ、レーズン、キャンディーなどを各自が一日分を好きだけ握み取っていたが、食糧全体に余裕もあり、行動後にも上部テントでは麺類を、BCではビスケットなどを食べていた。

日本での準備もほとんどしない私達であったが、概ね満足する食事をとれたのは金銭的にも恵まれたためであろう。残念な点はコックが日本食のレパートリーを持たず、辛すぎる味付けに参ったことである。

北里研究所病院・事務部・中嶋氏、内科・高橋医師、整形外科・阿部医師のご指導、ご援助で以下の薬品を取りそろえた。

遠征中、幸いにして大した事故、病気もなく薬品に不足を感じることはなかった。キャラバンルートは、衛生状態が悪くないのか治療に訪れる人やポーターは少なかった。しかし、BCへの荷上げでは頭痛を訴えたポーターが多く、鎮痛剤を多く持つ必要性を感じた。また、咳のためのトローチ類も少なく感じることがないようにしたい。

薬 剤 名	総 数	薬 剤 名	総 数
◎胃腸薬		◎ビタミン剤	
セスデン	231	アリナミンF	980
ナウゼリン	168	◎外用薬剤・医材名	
AM酸	84	ゲンタシン軟膏 10g	10
コランチル	207	プロバデルム 5g	10
ザンタック	112	リンデロンVG 5g	10
ラックB	303	ヒルドイド軟膏 20g	10
タリビット	124	ナパゲルン軟膏 50g	10
フェロベリンA	350	フラビタン 5ml	5
ロベミン(強力)	96	リンデロンA 5ml	5
ブルセニド	28	セダナジン 5ml	5
ブスコパン控薬	14	シュリプロント控薬	30
◎鎮咳剤		エキザルベ 5g	10
セlestamin	150	イソジンガーグル	
メジコン	204	マスクン	
ポララミン	40	イソジン液	
◎導眠剤		ピンセット	
リスミー	70	舌圧子	
◎感冒薬		消毒用ボトル	
EA	120	綿球	
PL顆粒	120	ケーバイン	
◎解熱・鎮痛剤		弾性包帯	
ケフラール	120	スピード包帯	
インダシン控薬	40	メッシュポア	
ロキソニン	378	紙絆	
◎利尿剤		酸素マスク	
ラシックス	28	綿棒	
ダイアモックス	16	三角巾	
		脱脂綿	
		油紙	

マカルーを終えて

雑 感

石川 一郎

'93年ブレ、エベレスト(チョモランマ)に18隊が訪れ、5月10日、37人の登頂者を出したと新聞で報道された。過去最多の隊数であり、同一日の登頂者も最多だったとの事だそう。

世界最高峰であり、初登頂からちょうど40年目という事もあったのだろう。

有名峰に同時期多数の隊が入山するのは、もはや当然の事なのだろうか。

今回、'92年のポスト、マカルーもエベレストにくらべればはるかに少ないが、我々を含め3ヶ国。シェルパ、キッチンスタッフ等含めれば、40名を越えると思われる人間が同じ所にBCを設営した。

マカルー峰のスペイン隊、日本隊を含めれば50名は突破していたことと思う。

多数のそれも数ヶ国の人間とお近づきになれるという事は、普段の生活ではめったに起こらない事だし、それなりに楽しく、お互いに刺激もあるし有意義な事であろう。

学生時代、比較的静かな山登りをしてきた自分、特に自分のような性格の人間には些かどころではなく、かなりうとうしいものを感じた。

その40名近くの人間がマカルー・ラまでは同一ルート上を往復する事になった。

幸い我々の隊が最も早くBC入りし、工作も我々の隊が行ない主導権を握ることができたが、もし他隊が先行しており、あらかじめ張られたロープを彼らに許可を求め、何らかの代償を求められ使うような結果になっていたら、終わった後どう感じただろうか。

実際の登山活動に大きな支障があった訳ではな

いが、CSからの出発がほぼ同じになったような時、フィックスに彼らより早く着こうとしてペースを崩してしまったとか、途中で待たされるのも嫌だから必要以上に出発を遅くしたり、すれ違いで自分が下降のときなど登り優先の考えでゆずってしまったり、自分の思いどおりに自分のペースで歩きたいのに、繁華街で人込みに邪魔され思うように歩けないときのようないらだたしさを感じた事もあった。

こんなことは自分の考え方、行動の方法によって簡単に解決することができるものだと思うし、小さく考えれば1隊の中にもあることだろう。ただその場合、ある程度気心の知った人間が集まっていれば、納得できる部分があるように思える。

このような意味では1986年のヒマルチュリは、自分は登頂できなかったが、自分達だけの山登りをすることができ、完全燃焼できたと思う。

できるなら、あの時のように自分達の隊のみで、そのルートを独占し登りたい。

有名峰の遠征にこんなことを考えるのは、もはやわがままな事なのだろうか。

たのもしきシェルパたち

山本 修

ネパールヒマラヤの登山を語るうえで、シェルパは不可欠の存在であろう。このことについては、異論のないものと思う。

しかし、今回のマカルーがヒマラヤ登山初体験の私にとっては、シェルパもまた未知の人達であった。もちろん多くのクライマー達が残した記録や、仲間の口から伝えられる話で彼らの逞しさ、やさしい心遣い、プライドの高さ、金銭面での抜け目のなさなどは頭の中では理解されている事柄だった。だが、実際の行動を共にしたことがない私が彼らの力を推し量るまでに至らないのは当然である。

コンパクトな形で8,000m峰に登頂することを目指した私達の隊は、当初4人のメンバーに対し

て、3人のシェルパで構成されていた。最近の例から見れば、この比率は意外なものではない。そう私は受け取っていた。しかし、いつの間にかシェルパは4人に増やされた。これはより確実を期した隊長の判断によるが、事後承諾を求められた私も負担金が少々増えるにせよ、必ず登頂したい気持ちから隊長に同意をしていた。

何のバックも持たず、何の資金援助にも期待していなかった私達の隊だったが出身母体である日大山岳部の先輩方、後輩達を中心に多くの募金をいただき、感謝の気持ちと共に心強くネパールに出発することができた。その一方でうれしい誤算は、出発直前に一つの問題を発生させた。それは、その募金の使途であり、具体的にはシェルパをさらにもう1人増やすべきだという隊長の意見であった。これは以前から、複数の先輩より進言されていたことだったが、村口さんはもう不要であると強くこれに反対した。

今まで縛りに縛った計画なのだから、金銭的な余裕が生まれたとしても、そのスタイルを変えることはない。という主張に私もうなずいていたが、隊長や諸先輩のアタックまでの体力的な疲労はできるだけ抑えるべきだという発言を否定することもできなかった。やはり私には、シェルパの持つ力や役割が理解できていないのである。

先発隊が出発する成田空港でもこの議論は繰り返された。カトマンズでもう1人探せ、という隊長の言葉を背に私達は飛び立ったが、現実にはこの言葉は黙殺された。必要としていないし、遅すぎるという判断である。このために、キャラバン中にもこの論争は再燃した。シェルパを1人増やして、安全性と登頂の可能性をより高めたいとする隊長。4人から5人にするメリットは少ないという村口さん。2人の意見には相変わらず接点がなく、私もその答えが見つけれないままだった。しかし、もう5人にはできない。そして、登山開始は目前に迫っていた。

今回のサード、ニマ・テンバは1986年の日大のヒマルチュリ隊のサードでもあった人物である。その他、数多くの遠征隊で活躍し、今では屈

指のシェルパとなっている。私も様々な人々の話から彼の優秀さは知らされていた。そんな彼はシェルパにしては長身で体格もいい。もっとも最近、生活に余裕ができたためか太り気味のような。

このニマ・テンバの人脈によって、他の3人のシェルパは集められていた。

まず、若いフルバ・ギャルツェン。生真面目な彼は、昨年のベルニナ山岳会隊でマカルーの頂上直下に迫っている。ルートには精通しているはずである。

次にアン・カミ。年齢はニマ・テンバと同じ37才で古くからの仲間でもあるらしい。サードの経験も豊富で、これが31回目の遠征隊参加になるという大ベテランの彼を、単なるクライミングシェルパとして雇用できるのは、もったいないような話でもある。

そしてアン・サルキ。まだクライミングシェルパとしての経験は浅いらしいが、締まった顔と体つきはいかにも強そうな印象を与えた。彼には神戸出身の奥さんとユウタロウという赤ちゃんがいるらしい。

最真面目なのかもしれないが、いい人材が集まったと村口さんと密かに満足し、4人で充分の意を強くしていた。

そして、彼らは期待通りの活躍をしてくれた。私達の2倍の荷を背負って、半分の時間で歩いてしまうという感であった。なかんずくアン・サルキのスピードは図抜けており、私達がC1からC2に上がってホッとしていると、彼はその日2度目の荷上げを終えてしまうありさまだった。

彼らはルートワークでもその力を発揮してくれた。C1からC2へのFIXロープはアン・カミとフルバ・ギャルツェンによって、その全てが張られた。このために一時は、隊員の高所順化がルートの進展に追い着いていけない状態でさえあった。

またクライミングシェルパ以外のスタッフも荷上げに従事してくれた。ほとんどがガレ場歩きであるBCよりC1へは、メールランナー、キッチンボーイ、キッチンヘルパーが何度も往復したばかりでなく、リエゾンオフィサーが隊長の個人装備を荷上げする前代未聞の珍事も起きた。

この点でシェルパを増やして隊員の荷上げ量（特にBC～C1間）を極力減らしたいという隊長の意向は杞憂であった。むしろこれ以上にシェルパがいたらと思うとゾッとさえしてしまう。まるでシェルパの登山隊になっていたのではないかというほどである。ニマ・テンバのサーダーも実に堂々としたものであった。

力強いシェルパとの友好的な関係の中でアタックは迎えられた。しかし、結果は失敗であった。8,000mを越えて、なおラッセルに苦しめられた。ここで思うのは、シェルパがもっと多かったら登頂できたのであろうかということである。

厳密に言えばシェルパはガイドでもなければ、パートナーでもない。私達は彼らの持てる力を利用して、より高くを登ろうとする。私は彼らに登らせてもらおうというつもりはない。自分自身が登る力もあってこそそのシェルパである。4人のシェルパがベストを尽くしながら登れないのは、私自身、あるいは私達の力と運が欠けていたと思う。

ヒマラヤ登山も個人の遊びという時代であるし、この隊もそれを体現していた。ルールは一人一人のものである。何が何でも登りたい。簡単に登れたら山は面白くない。どう考えるも自由である。メンバー4人の隊なら4人の意識もそれぞれ異なる。そのバランスの中で隊は構成される。

そして誰もがルート工作や荷上げの全てをシェルパに期待していたとは思えない。私達の実力でマカルーの頂きをつかみ取りたかった。シェルパがあと何人いたら残した距離を埋められたか、と考えるのはやはりナンセンスな気がする。それは自分の登山ではなくなっているように思えるからだ。

登頂という収穫のない、マカルー登山だったが、最大の収穫と言えば、これもまたシェルパとの出会いだった。特にアン・カミというシェルパに強い印象を与えられた。どちらかというとき寡黙なニマ・テンバに対して、彼は実におしゃべりでひょうきんである。そんな彼を私達も愛着をこめて「アン・カミさん」「アン・カミさん」と親しく

呼んでいた。

エッチな話題を誰よりも得意とする彼の周りになると、日本人もネパール人も誰でもが楽しくなれた。しかし、また誰よりも山の話者を豊富に有しているのも彼である。数々の遠征隊経験は私達にとっても、若いシェルパにとっても良き参考書になっていた。その名も知られ「あのニマ・テンバとあのアン・カミを2人とも雇えるなんて素晴らしい」とスイス隊からうらやましがられた。実際に彼の力量はもとより、その判断に私も大きく信頼を寄せていた。そんな彼であるから、彼が第2次アタック中に、足先の凍傷を訴え引き返すことになったのは、私にもショックだった。

カトマンズでは大のビール好きだった彼だが、キャラバンにはいるとピタリと禁酒してしまった。帰りのキャラバン終了まで他のシェルパも同様にしていたが、一番最後まで厳しく守っていたのも彼だった。また咳の止まらぬ石川に対して、禁煙するように勧告したりと自己管理に厳しいばかりでなく、メンバーの健康にも気を遣う人だった。

若いキッチンボーイやシェルパにも慕われ、言葉に不自由しているキッチンヘルパーには言葉を丁寧に教えていた。本人も日本語の習得には熱心で、彼の家にはいつも日本語の会話集がテーブルに置いてあった。下ネタが大好きでふざけてシェルパニの女性に抱きついていているような彼も、家では真面目な愛妻家で、良きパパであった。

アン・カミのみならず、皆が優れたシェルパ達だった。余裕しゃくしゃくで荷上げを終え、屈託なくふざけ合い、笑っている彼らは全くだのもしかなかった。彼ら以外のスタッフにも恵まれた。快足で信用の置けるメールランナー、カミ・フルバ。ネパールの激辛料理で私達を満腹にしてくれたコック、パサン。陽気で働き者のキッチンボーイ、リンジ。彼とフルバ・ギャルツェンはハーモニカの名手だ。ひ弱そうに見えて、実は最強のリエゾンオフィサーだった、シュレスタ・ジー。

登頂はならなかったが、良い人々に囲まれて楽しく登山ができた。近い将来、彼らとまた8,000mへの旅に出る機会を持てることを願っている。

雪が深いうえに少しばかりルートファインディングをミスして時間がかかり、イメージとは大分違った行動になった。このまま行くと頂上に着くのは、うまくいって夕方、帰幕はどう計算しても夜に突入する。夜になることはそれ程気にはしていないが、できれば早く帰幕するにこしたことはない、と思っていた。

「下りろ！ 一体、天幕を出てから何時間行動していると思ってんだ。このまま行くと夜になるゾ」「まだ、下りるには早すぎる。もう少し行きたい」「酸素はどうなんだ」

「計算しているから、問題ない」

C3の岡田としばらくまとまりのない交信を交わし、1時間後にもう一度トランシーバーを開くことにして、スイッチを切った。

くそったれが、どうなってんだ、この雪は。雪質さえ変わってくれば、頂上までの距離は、いともたやすくつめることができるように思われた。

9月30日、午前1:00頃、昨夜、食べ残した高野豆腐を温めながら、僕はいつものように靴紐を結び、出発の準備にとりかかっていた。『うまくいけば午前中、遅くても2時には頂上に着くだろう。少なくとも、昨日ラッセルしてロープも張ってきたし、時間はかなりかせげるはずだ』『酸素はできる限り吸わないで、後半に残そう。いや、目一杯吸って一気に登ろうか』

簡単な食事をとり、真っ暗なC4を後にした。風は無い。満天の星だ。トラバースを始める。酸素はまだつけない。体調は良好だ。『登れる』僕は確信した。

30分ぐらい歩いただろうか。突然、アン・サルキが立ち止まった。

「どうした？」

しばらく足元を見ていたと思うと、いきなり振り向いた。

「靴が、壊れた」

何を言っているんだ。ジョークにしては、タイ

ミングが良くないな……

再び、アン・サルキが言う。

「靴が、壊れた」

ヘッドランプで彼の足元を照らすと、見事に爪先の部分が縦に割れたプラスチックブーツがあった。『このままではだめだ』僕は一瞬にして判断していた。

「俺のオーバーシューズとお前のスパッツを交換する。それで1時間だ。1時間歩いてダメなら、一旦C4へ戻る。OKか？」

僕たちは複雑な心境で、装備を着けかえた。思うようにアイゼンが入らず、凍えた手で調整しなければならなかった。面倒な作業だったが、一旦、天幕なんかに戻って修理していたら、再度のアタックをかけられないのはわかっていた。

昨日、ロープを張ったクローワールの取付まで来る。いきなり腹痛が襲う。今度は僕のトラブルだ。あわてて身につけている面倒なものをはずし、慎重に夜の冷気に尻を出す作業をしなければならなかった。『なれない物を食うもんじゃないな…』

シェルパに足の状態を確認し、2ピッチユマリングをする。美しい夜明けだ。20m程ロープを継ぎ足し、フィックスはここで終了だ。ロープを結び、セラック帯に向かってトラバースを始める。予想していた程の悪い部分はなく、短時間で抜けることができた。

この調子で行けば、まったく問題はなかった。セラックの向こう側は、そこまでのラッセルとは変わり、僕たちの前進をはばんだ。どのくらいの時間が流れたのかもわからず、とにかく一步を踏み出すことに全力を注ぐ必要があった。頂上は手の届くような距離だ。ヒマラヤのスケールが近くに感じさせるのか、時間ばかりが無情に過ぎていく。僕はトランシーバーを再び開けなくてはならなかった。できることならこのまま進みたかったが、そういうわけにもいかなかった。

「やめだ、帰ろう！」

アン・サルキは、「もう少し行きたい」と言う。「だめだ。早く帰らないと、夜になっちゃう。お前の足も凍傷になっちゃう。明日のチームが、アタックできなくなる。だから帰らなきゃだめ

なんだ」

僕はかついできたロープ、O₂、ガチャをその場に残し、下降にうつった。

僕がC4で予測した時間と行動は大きく違っていた。ここで無理して、登頂するか、断念するか。僕は後者を選択した。「もう、やめろ」という隊長の言葉が無視してまでも、頂上へ向かう価値はない。僕達の登山隊は、少なくとも言いたいことは言い合うが、どこかで最優先しなければならないものは同時にまた、持ち合わせている。

予想がつかない部分を予測しきれなかった自分の判断の甘さに今回の実力負け。

僕は、湧きあがるガスの切れ間から広がるヒマラヤの峰々を眺めながら、ゆっくり下降をつづけた。疲れていたが気持ち良かった。登れはしなかったが、けっこう幸せな時間を感じていた。

もう一つの土曜日 part 2

岡田 貞夫

昨日の村口、アン・サルキの第1次アタックは時間切れで終わった。

朝5時、睡眠用酸素がカラになったのだろう、途端に強烈な寒さを感じ目をさます。足がメチャクチャ冷たい。ここC3の標高は7,400m、温度計の目盛りはバカになっていて計測出来ない。シュラフをたたむつらい動作より先にパーナーに火を点け、茶を沸かすための水造りを始める。今日の第2次アタックは4人、昨日と同じ条件なら8,200mまではトレースをつけてあるので、天気心配もなさそうだし頂上が我々の足下になるのは、ほぼ間違いないだろう。私自身の登頂はすでに諦めておりアタック用の酸素マスクは荷上げていなかった。体力の限界らしきものも感じてはいたが、可能性のある限りさらに上部を目指したかったが、隊員を無事に安全圏へ下降させる方に比重をおく事にした。しかしBCに居たのでは指揮しづらいと判断しここまで登ってきた。

村口を起こしお茶を飲み、メシを作り始める頃

になると天幕内は太陽の恵みの中に包まれ、2時間前の寒さが嘘のような暖かさを取り戻している。

「オイ、今日は登れるヨナー」

「エー、登りますネ」

こんな会話が出始めた頃、天幕外に雪をきしませる山靴の音がし、ビックリして顔を出してみるとアン・カミが下降して来たではないか。理由を聞いてみると足の指の凍傷の危険を感じ始めたので登頂を断念して一人下山して来たと言う。まるで元気がなく話好きの彼にしては早々にシェルパ用の天幕に入ってしまった。3人の姿を双眼鏡で捜すが発見出来ない。もう9時を過ぎ、5時間以上は行動しているのにトランシーバーには何の連絡も入ってこない。

「俺達、相性悪いんだよナ、きっと。3回も一緒に来てまたも登れないなんてヨ」

「俺ももう疲れましたヨ。岡田さんの面倒を見るのはこれで終わりにしますヨ」

「何言ってるのー、オメーこそ帰れば初めてのガキが生れるんだ、残りの人生は借金地獄と子育てだけよ」

「もう、歳だしこれが最後、一生ヒマラヤには来れないんだから、よく見といた方がいいですよ」

いつもの言い合いをしている所へ、突然山本が出現した。

「お前どおしたの？ 上と下ルートを間違えたんじゃないの。諦めるには時間早すぎるよ」

「エヘヘ、もうダメ疲れちゃった。イッチャンにフラついていると脅されて8,000mラインで帰って来ました」

「オメー、デカイのは図体だけで、本当、心臓は並以下なんだから」と村口。

これでアタックメンバーは半分の2人に。負担は増すがこういう時の石川への信頼度は高く、心配はないし、日大の名を背負っていない気軽さからか天幕内の3人は石川の苦闘も忘れて下山後の南の海の話題でいっとき盛り上がる。

最終キャンプC4の標高が7,800m、頂上までの高度差650m、過去の成功した隊のピークまでの所要時間は無酸素登山であっても12時間とはかかっていない。それ以上の時間がかかる時は条件

が悪すぎて不成功に終わっている。酸素使用となれば、微力な我々であっても1~2割の時間の短縮は可能であるとの計算をしたのだが、昨日の村口の体力をもってしても12時間頑張っても400mの高度しか稼げなかった事で、今日のアタックはさらに雪の深さ、雪質の悪さを考慮し出発時間の修正もした。今日がラストチャンスの日である。もし好天が続くとしてもBCでの体勢建て直しは考えていない。5,300mの高度では休養にならない事を我々は知っているから、最終目的は4人の笑顔がBCに揃う事である。そんな事を考えている時、石川の声がトランシーバーに飛び込んできた。「エーこちら石川です。現在プラトー上8,100m。ルンゼの真下に着きました。調子もまあまあです。少々遅れてますが先へ進みます」

淡々として息切れもなく、当方に安心感を与えてくれる声である。

「調子よさそうだな」と村口。

「でも、あそこから先、相当に雪が深そうですヨ」と双眼鏡を覗き込みながら言う修。

「予定よりだいぶ遅れている。今日も無理かな？」と言いついになり、声をしまう。今は我々には何も出来ない。石川とギャルツェンを見守るしかない。12時までに頂上稜線上8,300mに達すれば、あとは緩傾斜の尾根歩きとなり何とかなるだろう。「今日のため絶対にトップに出ずに、体力を温存してたンスヨ、頑張ってるよ」と修。

「アイツの性格慎重だけど真っ暗だからナ、ここでキメないと一生沈みっぱなしだぜ」と村口。

時折、ルート指示をおおぐために交信をしてくるが、ペースは遅々として上がらない。

いまほど自分がマカールの内懐に抱かれている事を強く感じている時はなかった。ヒマラヤに関心を持ち始めた頃より憧れていた山はマカールであった。素晴らしく輝かしいクライマー、トレイ、フランコ、マニョヌ等が初登頂した山に、今自分達もあの時と同じ

山肌に足跡を残そうとしている。同じアルンリバーを渡り、彼らをして言わしめた「ロストワールド・セドワ」もキャラバンして来た。そしてマカールの頂をより確実に踏むには正に理想的なルートとして感銘を受けずにはいられないここ北西稜。我々にも先駆者のような幸福を味わう事が出来るのだろうか？ それもあと僅かな時間で結果がでるはずだ。

粘る石川、だが時計の針は容赦なく時を刻んでいく。設定したタイムリミットも越えようとしている。日が暮れてからの下降は、確実に死が近いものになってしまうであろう。

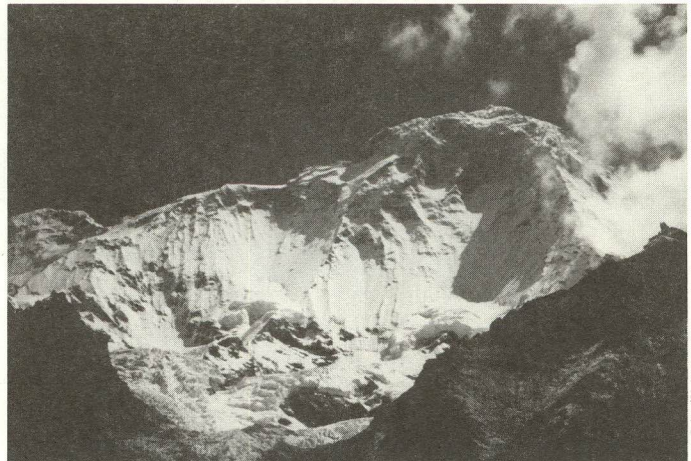
幕切れは意外にあっさりやって来た。酸素の残量を確認し危険を察知したのだろう。断念すると伝えてきた。

ほんの数分前までの緊張していた天幕内の空気がゆっくりと和らいでいくのを感じていた。

我々は素晴らしいシェルパ達に恵まれ、大勢の人柄の良いポーターにも恵まれ、天候にも恵まれた方であろう。ほんの少しの運を除けば。

皆より一足先にC3の下降を始める私に向かって、「今回のマカール、けっこう面白かったですヨ」の村口の一言が、とてもすがすがしく印象的であった。

これから先、6年前のあの事故から今後は少しだけかもしれないが解放される気分になっていた。



▲BCよりマカール全景

会計報告

— 収 入 —

個人負担金	5,980,000円
一 般	1,894,380円
<hr/>	
合 計	7,874,380円

— 支 出 —

< 国 内 >

渡 航 費	720,000円
装 備 費	350,000円
食 糧 費	100,000円
事務通信費	230,000円
医 療 費	20,000円
保 險 料	50,000円
登 山 料	1,000,000円
酸 素 代	680,000円
輸 送 費	160,000円
報告書代(予算)	400,000円
雑 費	200,000円

小 計 3,910,000円

< 国 外 >

滞 在 費	250,000円
装 備 費	400,000円
シェル設備費	830,000円
食 糧 費	500,000円
燃 料 費	20,000円
人 件 費	1,070,000円
事務通信費	30,000円
保 險 料	55,000円
輸送交通費	150,000円
通 関 費	250,000円
雑 費	400,000円
(ハンドリング含む)	

小 計 3,955,000円

支出合計 7,865,000円

残 高 9,380円

御協力者

(敬称略・順不同)

株式会社アライテント
株式会社インターランド
大倉スポーツ用品販売株式会社
群馬県山岳連盟
自衛隊山岳連盟寧金抗沙峰登山隊1992
株式会社デバック
白山会
HOTEL SUNSET VIEW

株式会社ICI石井スポーツ
桜門山岳会
(株)北里研究所北里研究所病院
コスモトレック
株式会社チョロバザール
東京農業大学農友会山岳部
ヒマラヤ同人
株式会社モンベル

アルパイン・ツアー・サービス株式会社
有限会社オフィス・エム
クラブ 姫
(株)さくら銀行渋谷東口店
株式会社ティ・エッチ・アイ
日本大学山岳部
株式会社フロンティア
郵船航空サービス株式会社

秋山 剛	阿部 均	安藤 寛	青木 繁	赤井 一隆
A. S. TULACHAN	Arjun 紘子	伊東 一雄	井本 重喜	家口 寛
岩本 司	石井 達男	池田 錦重	今村 裕隆	井手 信二
岡本 里枝	及川 美奈子	小笠原 岩雄	太田 毅	大浦 明人
大上 淳	大崎 直彦	大城 泰	大谷 直弘	大津 二三子
大林 一成	尾上 昇	金子 浩	神崎 忠男	神田 秀仁
川口 吾郎	川瀬 幸子	岸田 達明	菊谷 兼一朗	菊池 典男
木下 茂徳	木津 直人	熊谷 義信	黒羽 秀夫	小池 英雄
甲田 俊太郎	越谷 英雄	古山 和彦	近藤 陽子	今野 善郎
嵯峨野 宏	斎藤 昌代	崎田 熙	佐藤 光由	笹木 正綱
桜井 勝之	下崎 雄二	下村 忠幸	柴田 健一	波谷 寿雄
白井 隆	住吉 仙也	杉 美成	鈴木 弘之	鈴木 克巳
関 孝治	高橋 正昭	高橋 正彦	高橋 路子	高 緑繁
高澤 誠	瀧島 久光	谷口 元	竹田 寛次	田口 克巳
田山 将	田上 陽一	田中 昇	田中 祥治	田 仲隆
田端 宏好	戸倉 正博	戸村 貞男	徳田 昌久	豊島 義明
中山 昌之	中村 進	中津留 茂	中嶋 啓	中嶋 正幸
名塚 秀二	内藤 美佐枝	新田 業	貫田 宗男	根津 皖一
羽賀 正一郎	橋本 健	原 康博	原田 雅子	原田 洋
早坂 敬二郎	平山 善吉	平野 隆司	福永 克夫	古野 淳
古野 道子	深瀬 一男	深田 良一	福島 繁雄	福島 正明
星野 辰雄	堀井 千恵	丸山 節子	松井 正志	松田 昭
松田 雄一	松野 豊	真鍋 政道	増井 外志	牧野 良明
真神 勇二	楨田 光江	宮原 智一	向笠 輝雄	向笠 茂雄
宗方 慎彦	村井 龍一	村上 重昭	村木 富士之	目黒 義嘉
森 和彦	素木 番三	望月 重成	森本 康裕	茂呂 嘉靖
八木原 罔明	山下 康成	山崎 達成	矢崎 和	山 平
渡 辺 恭三	渡 辺 将	渡 辺 勇		

— 編集後記 —

僕たちがそれぞれに思い描いたマカルーは、もう少し先にあった。

この登山隊には記録に対するアピール性は何ひとつない。あるのは、個人がそれぞれの立場でマカルーへアプローチしたということだけだ。そして登れなかったという事実だけが残った。

理屈や理論に逃れて、結果をおろそかにすることはまちがいだ。少しでも、残された距離を縮めていく努力をしなければならないだろう。僕たちは“試みる”という最も基本的な行動原理を常に喚起しつつ置きたいと思う。それは自己内面へ問いかける愉快的アドベンチャーだ。新しい次の行動を生み出すことは、もしかしたら、少しマカルーに近づくことかもしれないから。

雪豹クラブマカルー登山隊1992に、ご協力いただいた多くの皆様に感謝し、お礼申し上げます。ありがとうございました。

編集担当 村口 徳行

— MAKALU —

発行日	1993年6月22日
発行所	雪豹クラブマカルー登山隊1992 〒101 東京都千代田区神田佐久間町4-16 ☎03-3866-2473
発行責任者	岡田 貞夫
製作	(有)オフィス・エム 〒195 東京都町田市鶴川6-7-1-408 ☎0427-37-7087
印刷所	豊文社印刷(株) 〒201 東京都狛江市岩戸北3-11-12 ☎03-3489-0576

YUKIHYO CLUB JAPAN MAKALU EXPEDITION 1992

古野淳